

---

# 新たな世界で

コーヒー

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

新たな世界で

### 【Nコード】

N0604T

### 【作者名】

コピー

### 【あらすじ】

目を覚ますとまったく別人の身体に憑依していた。しかもその世界はコードギアスの世界だった。周りにはどんとんと原作のキャラクターが現れ、主人公も自分の歩む道を決めて行く。

## 1話

ふと目が覚めると見覚えのない、いつもと違う天井が目映る。

周りの景色を見つめると、どうやらここは病室のようで、自分の腕には点滴がうたれていた。

起きあがろうとすると全身に痛みが走る。

痛みに体を押さえようとして、自分の身体に違和感を感じた。

俺の肌の色が変わっている。

アジア人特有の黄色っぽい肌の色ではなく、白人のような肌の色になっている。

それはまるで自分の身体ではないようで、焦った俺は痛む身体に鞭打って何とか現状を確認しようと思いを回す。

そしてベッドの横に置いてあった鏡に気付き、乱暴にそれを掴み、覗きこむ。

鏡に映る姿は17年共に過ごしてきた俺の顔ではなかった。

まるで見覚えのない顔、自分とは似ても似つかない他人の顔がそこに写っていた。

わけのわからない現状に混乱する頭を押さえ、俺は叫ぶ。

「なんじゃこりゃー!？」

俺の叫び声を聞いて駆けつけた医者と看護師は、何とか俺を落ち着かせると事情を説明してくれた。

どうやら俺の名前はレイス・リントンドと言う名前の人間らしい。

間違いなく本来の俺の名前ではない、無論レイス・リントンドという名も聞き覚えはない。

記憶にある本来の俺は間違いなく日本人、大学を目指している高校3年生であり、それなりにアニメやマンガやゲームが好きで、中でもガンダムやコードギアス、スパロボなどのロボットが出てくる作品が好きであったという事。

さらにその中でもスパロボOGが好きで、何回もプレイし、アルトアイゼンが一番のお気に入り機体だったという事。

そして今思い出すことが出来る一番新しい記憶は、塾の帰りに家まで歩いているとき、突然背中が熱くなり、ふりかえってみると全身黒ずくめの怪しい男が立っている。背中に手をあててみるとナイフのようなものが刺さっていて、ようやく俺はこいつが通り魔で、俺がこの男に襲われたという事を実感した。

そこで意識を失ったようで、そこから先の記憶はなく、次に目を覚ましたときにはレイス・リントンドという人物になっていた。

どうやら今俺がいるこの場所はやはり病院のようで、訓練中の事故が原因で体を激しく打ち、一週間ほど眠り続けていたらしい。

なんでも、俺ことレイス・リンテンドは軍学校に入っていて、KMFの騎乗訓練中にむちゃな突撃をしたせいで機体を壊してしまい、俺自身もそのとき頭を強く打って今まで眠っていたらしい。

KMFという単語を聞き、俺はここで自分がコードギアスの世界にいたのだと気づく。

今まで事情を説明してくれた先生は、いくつか質問をしてから「今はひとまず安静にしておきなさい」という言葉を残して病室から出ていく。

とりあえずまだ混乱しているが、自分がレイスになったということに自覚すると、俺ではない、レイスの記憶が頭に流れてくる。

その中にはレイスの人生がまるで走馬灯のように俺の頭の中を流れる。

その中にはレイスが事故にあった時の光景も流れていた。

そこから得たレイスの情報なのだが、どうやらレイスはナイトメアの操縦は上手い。

それこそ軍学校でも一目置かれるほどには腕がいらしい。

しかし猪突猛進なところがあり、すぐ熱くなりやすい、そのせいで周りが見えなくなるところがあったせいで、常に彼は2番手以降の地位に甘んじていたらしい。

正直言って俺とは正反対とまでは言わないが、かなり性格が違うみたいだ。

これから俺はレイスとして生きて行かなければならないので、少し気をつけなければならぬ。

それから1ヶ月ほど入院をして今日ようやく退院。

看護師の方々や担当の先生が病院の前で見送りをしてくれている。

この人たちは記憶が混乱している俺を懸命に看護してくれた人たち、今でもすごく感謝している。

お礼を言って「また時間があれば遊びに来ます」と言って病院を後にして、俺は現在の居場所である軍学校へと向かう。

学校にもどるとレイスの知り合いであった生徒が心配してくれ、教官は俺にげんこつを喰らわせ、泣きながら俺の無事を喜んでくれた。

俺の所属するブリタニア軍士官学校。

軍に志願する者はこの学校で基礎課程をクリアし、その後パイロットコース、管制官コース、医療課コースなどのそれぞれの専門分野を修めると卒業となり、各地に広がるブリタニア軍基地に配属される。

第98代皇帝、シャルル・ジ・ブリタニアの提唱する超実力主義は当然この士官学校も例外ではない。

実力のある生徒は飛び級が認められ、即戦力として戦場に送られ腕を振るうことが出来る。

エリートは華々しくデビューすることができ、その実力を遺憾なく発揮することが出来る、そしてそれ以外は遅れて卒業し、すでにデビューを果たしているその強者の下で駒のように働かされる。

このようにブリタニア軍は皇帝の提唱する超実力主義を体現しているのだ。

俺は入学1年目にして、パイロットコースの上位を争うほどの実力があるらしい、というのはすでに情報として知っているが、実際にはどうなのだろうか。

あくまで上位に食い込めるのはレースの力であり、俺の力ではない。

俺がレースになったことで、もしかしたらKMFが扱えなくなっているかもしれない。

そんな漠然とした不安を胸に、俺は学校にもどってきて、まずはじめにKMFの騎乗訓練を試した。

周りはおう少しゆっくりしろと止めてくれたが、これから生きて行く上で必要なことなので、その静止を振り切って訓練を行った。

だが、結果から言うとその心配は杞憂だった。

レースの体は俺が考えた通りに自由自在に動いてくれ、俺がKMFに慣れるまで30分もかからなかった。

まるで何年もこの機体に乗り続けてきた感覚が俺の中に広がる。

その感覚はレイスのものなのだろう、それが俺の中に継承されているのか。

一通り動かして機体から降りるとパイロットコースの担当教官がこちらに近づいて来る。

俺の目の前まで来て、にこりと笑うと、拳骨をお見舞いされる。

あまりの痛みに俺は頭を押さえるが、教官は関係なしに話を始める。

「レイス、体はもう大丈夫か？まだ痛みあがりなんだからあまり無理はするなよ」

教官は俺の心配をしてくれていたらしい。

ただ口よりも先に手が出るのはどうかと思う。

「はい、もう大丈夫です、心配かけて申しわけありませんでした」

俺は姿勢を正して教官にお礼を述べる。

「とりあえず一週間は激しい訓練は控えて体調を整えておけ、一週間後からはまた俺がみっちり鍛えてやる、覚悟しておけよ」

そういうと俺の返事を聞く前に笑いながら他の生徒の元へと行ってしまった。

レイスの記憶の中のあるあの教官はとても厳しく、まさに鬼軍曹の体現者というような記憶があるので俺は少し頭が痛くなる。

そして時がとまるわけもなく一週間後がやってきてしまった。

俺は訓練に行きたくなくなってきたのだが、それを見越してか教官は俺を見つけるとすぐに訓練室へと連れて行かれる。

そして俺はKMFのシミュレーターに乗っている。

「これより訓練を開始する、まずは連携を確認しその後3対3の模擬戦を開始する、なおこの模擬戦に敗北したチームは罰として俺特製の気合ジュースをプレゼントだ」

気合ジュース、それはパイロットコースの恐怖の対象で、あれを飲んだ生徒はなぜか話し方が片言になり、教官に絶対服従となり、気がついててもその間の記憶がなくなると言うまさに催眠ジュースのようなものだ。

そんな物を飲んだら俺はまた死んでしまうかもしれない、それだけは避けないといけない。

幸い生徒数は18人でチーム分けはランダムにしてなるべくバランスが良くなるようになってるので、めったに1位から6位が同じチームになる事はない。

現在俺は3位ということになっているので周りとしつかり連携を取りさえすれば、そうそう負ける事はなく隙を見て各個撃破しようと思っていた。

しかし今回はそのありえないことが起こってしまっ。

Aチーム、俺（3位）、12位、16位

Bチーム、1位、4位、5位

Cチーム、2位、11位、18位

Dチーム、6位、10位、15位

Eチーム、7位、13位、14位

Fチーム、8位、9位、17位

Aチーム対Bチーム      Cチーム対Dチーム      Eチーム対Fチーム

このチーム分けを見た瞬間、俺はめまいが起こり、他のチームのメンバーも哀れむような目で俺たちAチームのメンバーを見ていた。

対戦表の発表を見たあと、俺がひとりで頭をかかえていると、見るからにナルシストで性格の悪そうな男が近づいて来る。

「やあ、リンテンド君、どうやら僕たちBチームと試合のようだね」

こいつの名前はジャック・ライト。

パイロットコースでの順位は1位である。

こいつの家は子爵家でこいつは親の権力を自分のものと勘違いして、強いものには媚びへつらい、弱いものには高圧的な態度を

取る、まさに権力に溺れ腐敗した貴族を代表するような人間で、口にごそ出さないが、こいつは周りからも嫌われている。

ちなみにこいつは俺が平民の出でありながら、俺が自分よりも注目されている事が気に入らないのか、何かあるとすぐに俺に突っかかってくるので正直迷惑だ。

「そつみただいな」

何となくめんどくさかったので適当に返事をすることにした。

「は、今回の模擬戦は選考のバランスが少し悪くなってしまったようだけど、まあ運が悪かったと思ってあきらめるしかないね」

厭味ったらしいその言葉はケンカを売っているんだろう、だがいちいちこんなことに乗っていたらきりがない。

適当にあしらうことにしよう。

「ああ、まるで意図的に仕組まれたかのような組み合わせだな」

「そ、そんなことあるわけじゃないか、ははは」

当たり障りのない返答を返したのだが、どういつわけか目の前のこいつは酷く動揺したように慌てている。

まさか本当にこの試合は仕組まれたもの・・・

そんなわけないか、第一訓練生であるこいつにそんな事ができるはずもないだろう。

ましてや教官たちがそんな事に加担をするはずないし、気のせいだろう。

そう考えて、この事はこれ以上気にしないことにした。

それは置いておいて、明らかにこちらをバカにしたような態度で接してくる。

正直俺も腹が立つ、こっちも少し挑発してやろうか。

「まあこれだけBチームに有利な状況なんだ。もしこれで負けたら恥ずかしくて訓練出て来れなくなるだろうな」

自分でもやすい挑発だなと思ったのだが、目の前のこいつは簡単に食いついてくる。

「まあ万が一にもそんな事はありえないが、もしそんな事が起こったら僕は君のいうことをなんでもきいてあげるよ」

負けるわけがない、本当にそう思っているのだろう。

一寸の躊躇もなくそう返してきたこいつは、自身満々な態度を崩さない。

これは是非負けた時の顔が見てみたい、すこしやる気が出たので、こいつに賭けを持ち出す事にした。

「じゃあ負けたほうは訓練用のナイトメア・フレームの整備と掃除でもすることにしましょうか？」

すでに勝ちを確信しているこいつは、あっさりとこの賭けに乗った。そしてバカみたいに高笑いながら自分のチームのもとへと戻って行った。

これで賭けは成立、後はBチームを負かすのみ。

今回はチーム戦、チームメイトの協力は不可欠、よって俺はチームメイトにある作戦の提案を行う。

俺の提案を受けた2人は俺の考えた作戦に協力してくれると約束してくれた。

これで準備は万全、そしてついに模擬戦の時間になり、俺たちはそれぞれのシミュレーターにのりこむ。

さて、この世界に来てから、シミュレーターながらもついにKMFDでの実戦だ。

「それでは模擬戦を始める、AチームvsBチーム、開始！」

教官の声を合図に俺の後ろに待機していた2人の機体が動き始める。

俺は逸る気持ちを押さえながら、操縦桿を握りしめ、ペダルを強く踏み込んだ。

<ジャック>

僕には気に入らないやつがいる。

そいつの名前はレイス・リントンド。

彼は僕を差し置いて周囲から注目されている、僕はそれが腹立たしい。

何故一番である僕を差し置いて・・・ムカつく、ムカつく、ムカつく！

だから彼が訓練で失敗して入院した時は鼻で笑ってやった、所詮お前はその程度なんだよ、と。

だが、彼が戻ってきてから周囲の目は更に彼に集まっていた。

だから今度こそリントンドに恥をかかせようと、次の模擬戦で彼を徹底的にやっつけるために、ある教官に金を握らせてメンバー選考に細工をさせた。

そして今、対戦表を見て頭を抱えているリントンドを見つけた、更にプレッシャーをかけてやるため彼に近づき声をかける事にした。

彼もこの組み合わせには参っているようで、いい気味だった。

だが僕の企みなどお見通し、とも取れる発言には、まさか気づいたのかと思ってかなり焦ったが、どうやら違うようではあった。

彼は言葉を強くして、何とか平静を保とうとしているのだろう。

普段は言わないような安い挑発を仕掛けてくる。

聞いていて安い挑発だなと思ったが、この組み合わせで負けるわけがない。

すると彼の方から賭けを持ち出し、僕はそれに乗った。

これで彼に恥をかかせ、自分の評価をあげる絶好の機会を手に入れることができた、やる前から勝利が決まっている。

最高の気分で模擬戦を向かえる事ができそうだ。

彼が悔しそうな顔をしながら掃除をするのを想像すると、今から楽しみで笑いを抑える事ができなかった。

## 2話

第四世代KMFグラスゴーはそれまでブリタニアが開発して来たKMF、その中ではじめて実戦投入された機体であり、この機体が登場したことでブリタニアの軍事力は世界を脅かす存在となった。

初めてKMFが投入された日本侵攻時においては、その圧倒的な機動力で本土防衛に当たっていた日本軍をことごとく蹂躪していった。

今でこそ他国のKMF開発を警戒し、対通常兵器としてのコンセプトが念頭にあった第四世代から、更に技術を進めてKMF同士の戦闘を意識した第五世代のKMFサザンランド、その発展型であるグロスターが軍の主力となっている。

しかし、士官学校であるこの場所では、グラスゴーはまだまだ現役で動いている。いや、正確には世代交代に伴い、出番を失ったグラスゴーの活躍場所がこのような場所に移ったのは当然なのだろう。

さて、今回の模擬戦、登場機体は当然グラスゴー、基本装備はスタントンファア、アサルトライフル、スラッシュハーケンで、希望するものは許可を取れば大型ランスを使用できる。

俺は許可を得て大型ランスを装備する事にし、シミュレーターに大型ランスのデータを入れて訓練に臨んだ。

Aチームは俺以外は基本装備のままで、Bチームは全員基本装備を選択したらしい。

俺の以前までの評価は熱くなりやすい突撃バカとの事なので、俺は

これを利用してBチームを攻める事にする。

今回の模擬戦は市街地戦を想定して行われる。

KMFは市街地でも機動力を損なうことなくその能力を発揮できる。

敵を追い込むにも、畏にかけるにも、果ては一時撤退することになっても、市街地戦では地形データは重要なものになってくる。

模擬戦開始前にこのデータを配られたのだが、今回はあくまでも基本的な構造の町並み。

均等に区画整備されたビル群が、今回の戦場。

動き回るのに苦労はなさそうだが、策を用いるにも難しい。

俺たちは当初の予定通り、行動を開始した。

訓練開始の合図が出た。

僕たちBチームは作戦を考えたが、特に良い案が出なかったので各個撃破という事でまとまった。

リントンドの実力は厄介だが、彼が攻めあぐねて突撃して来たところ

るを皮切りにAチームの陣形を崩せば、そのあとは芋づる式のようにずるとこちらに有利な状況になるはずだ。

彼は訓練の際は大型ランスを装備していることが多い、今回も教官の所に行っていたので、間違いなく装備しているだろう。

たしかにランスは当たればダメージが大きく、直撃せずともかすっただけで機体に多少のダメージが残る破壊力抜群の武器。

しかし欠点も多く、ランスは扱いづらく、基本的に突きかなぎ払いの2つしか使用法がない。

ランスを構えている時は距離をとって射撃、間合いを間違えなければこれである程度は対応出来てしまう。

もっともリテンンドの腕なら、ある程度はそんなことなどお構いなしに突破してくる。なのでこちらにも相応の覚悟で対応しなければならぬ。だが、今回はチーム編成に細工をして、こちらのチームは全員上位に位置するメンバーで構成してある、これなら攻略に苦労する彼の突撃にも容易に対処できるだろう。

そうこうしているうちに目前にAチームの機体が現れる。

Aチームはリテンンドを先頭に、二人がその後ろからついて来ている。

リテンンドの機体はランスを構えており、その後ろの二機はアサルトライフルをこちらに向けている。

だが、それを黙ってみている僕達ではない。すぐさま前衛のリンテ

ンドに向けてライフルを撃ちはじめる。

目前から迫る銃弾を、リントンドは慌てることなく回避する。

その際、後ろの一機が横道に逸れて行く。恐らく回りこんで挟撃、だがそんなことはさせない。

僕達はその一機とは反対方向に機体を進める、そして僕はスラッシュハーケンを用いてビルの上に移動。

残りの二機はビルの陰に隠れてAチームを待つ。

だがモニターが示す周辺状況にはAチームの機体は映らず、ファクトスファイアを展開すると、どうやら分かれた一機と合流したらしい。

何時もみたいに突っ込んでくれればいいものを、まあそれならそれでいい。

僕は二人に指示を飛ばすと、次のポイントへと動き出す。

5分後、Aチームの側面をつくように、二人が攻撃を開始した。

上手く回りこんだようだ、さすがは成績上位者。

二人の攻撃でリントンドは他の二機と分断される。

そう、この攻撃はAチームを狙わせたんじゃない、目的はあくまでも後ろの二機。

僕の予想通りにリントンドは全速で戦場から離脱、ライフルでメッ

夕撃ちにされている二機は足を止めてビルの陰に隠れて、反撃の隙をうかがっている。しかしこちらの優位に変わりはない。

離脱か応戦か、とっさの判断が出来るかどうかで生き残るものが決まる。

今の場合なら残った二人よりも離脱したリントンドの方が正しいのだろう。

前者はダメージを負う可能性はあるが、体勢を立て直す時間が作れる。

後者は今のように体勢を崩したまま不利な状況に陥っている。

所詮はこの場だけのチーム、意思の統一など難しいだろうし簡単に崩れる。

ところがここからが驚くところで、リントンドはハーケンをビルに打ち込むと、ビルを足場に急転換し二機に襲いかかる。

あんなモーション見た事がない。突然のことに驚きながら、僕が慌てて指示を出すとこちらの二機も慌てて離脱する。

きつと外では今の動きでリントンドが持て囓られているのだろう。

シミュレーターの機体は全て同じ性能のはずなのに、難しい動きを簡単に見せられて腹の奥から黒いものが沸き出てくる。

この際二人などどうでもいい、必要なのは勝利。

そのために二人には役に立って貰おう。

僕は新たな指示を送りながら、二人と合流を測ることにした。

俺は現在単独で行動中、 囷役としてBチームを誘っている、焦って突撃を仕掛けた。

そして現在は上手く行かず戦場を離脱中、 そう言う風に見せておいたのだ。

あわよくばダメージを与えたかったが、こちらにも逃げる事を念頭においていたので、そこまで上手くはいかなかった。

そしてBチームは全員が追撃のためにライフルで弾幕を張りながら追いかけてくる。

俺はそれを何とかかわしながら目的地へと急ぐ。

俺の役目は他の2人が合流し、待機しているところに敵をおびき寄せる囷役。

囷役は危険だがこの役を他のメンバーにやらせるのは嫌だし、 実際

俺もやりたくはない。

最初この作戦を提案した時、

「俺がもし囷をしている最中にやられたらどうするか？」

「そもそも全員レイスの方についてくるのか？」

など不安点も有ったようだが、その場合の作戦もいくつか考えてあり、それも含めて説明すると作戦に乗ってくれた。

そして今は何とか追撃を振り切り作戦ポイントに到着し、二人に作戦の開始を伝えた。

二人はそれぞれスラッシュハーケンを使い、ビルの屋上へと上っており、そこから向かってくるBチームのナイトメアフレームにアサルトライフルで攻撃を加える役目だ。

上からの攻撃に、予測はしていたのだろう。

三機は慌てることなく回避行動を取る。

俺はビル群を回り込んで物陰に隠れた一機に背後からランスで突撃をかけ、俺の攻撃をかわしきれずその機体は戦闘不能となった。

同様にもう一機を戦闘不能にしたところで、俺は異変に気付く。

味方の2人に状況を説明をしようと思っていると通信を開くと、モニターには2人の機体が撃墜された事を示すlostという言葉が表示されている。

ファクトスファイアを使って索敵を開始すると、二人が待機していた場所にはジャックの機体が、その機体はすつと建物の影に消えるとその場で動かなくなった。

「どうやら自分の方から動く気はないらしく、俺を待っているらしい。」

「このままでいても仕方がないので、とりあえずジャックの待つ場所へと向かう事にしよう。」

ジャックが待つポイントにつくと、彼は俺が来るのを待ちわびていたらしい。

すぐに回線を開いて俺に通信してきた。

「やあリンテンド君、先ほどは残念だったね」

「お前はなんであいつらと一緒にいなかったんだ？」

俺の言葉に、意外そうな声で答えるジャック。

「彼らはキミの作戦を破るためのおとりにさせてもらったよ」

その言葉に、俺は思わず操縦桿を強く握り閉める。

「その事をあいつらは知っていたのか？」

「わざわざそんな事を言うわけないだろ、話したらあいつらが隠れてる2人を警戒してこちらの考えがばれるじゃないか」

何をバカなことを、こいつの顔はそう語っている。

こいつはどうかやら人間のクズみたいだ、俺はこいつだけは許しておけない。

「クズだなお前、もういいさつさとかかって来いよ」

「クズだと！ この僕が！ 死ぬ、リントンド！」

クズと言う言葉に反応して突撃してくると思ったが、冷静にライフで牽制して来る。

さすがにランスを装備している俺とはまともに接近戦をしてはくれないようだ。

機体を動かして弾幕をかわすが先ほどのおとりの時に動きまわったため、KMFに残されているエネルギーが少なくなっている。

対するジャックは俺ほど派手に動いてないので、こちらと比べてまだエネルギーに余裕があるだろう。

仕掛けるなら今、俺はそう決断しペダルを踏み込む。

ランスを突撃の構えにして、機体を全速力で前進させる。

ジャックも俺の考えに気づいたのか、機体を後退させて弾幕を張ってくる。

やはりまともにもやりあう気はないようだ、ここは最後の期待をかけて挑発してみる事にしよう。

「あそこまで大口叩いてやるのは俺のエネルギー切れ待ちかよ、やるのが小さい奴だな」

「だまれ！　そこまで言うならやってやる。いくぞリントンド！」

この一か八かの挑発に見事に乗ってくれたジャックは機体を旋回させて、俺の方へと突撃してくる。

俺達の間は30mほど開いていて、20、15、と近づいて10mになると俺はナイトメアの体勢を突撃から槍投げのような体勢にして、ランスを投擲した。

突然飛んできたランスに、ジャックは機体を無理やり傾けて何とか回避するが、そこへ詰めていた俺はスタントンファーでコクピット部分を思いきり殴った。

俺の渾身をこめた一撃はみごと撃破判定を出して、俺は何とかこの模擬戦に勝利する事ができた。

シミュレーターから降りると、周りのみんなが俺を囲んで勝利を喜んでくれる。

「よくやったな」

「お前らはすげーぜ」

といいながら一緒になって喜んでくれ、最後には胴上げまでされた。

Bチームの方を見ると、ジャックがすごい形相をしながらこちらを

にらんでいて、俺の視線に気づくと悪態をつきながら訓練室を後にしていった。

この次の日どうやらジャックが教官に金を渡し、不正していた事が判明したらしく、昨日の仲間をおとりにした行為も軍人になる者として、許すべき事ではないとの事で、お金を受け取った教員同様軍学校を辞めさせられたらしい。

罰ゲームをさせたかったが学校にいないんじゃないや仕方なくあきらめるしかなく少し残念だった。

こうして俺の初のナイトメア・フレームでの戦いが終わった。

<教官>

今回の模擬戦の結果には正直驚いた。

リントンドのチームの組み合わせとジャックのチームの組み合わせを見た時、ありえないと思ったが決まってしまった物は仕方がないので模擬戦中止する事もできなかった。

しかしリントンドは今までの突撃癖を逆手に取り、自らをおとりにしてジャックのチームをおびき寄せ討ち取るという作戦を見せてくれた。

その後のジャックのふざけた行為のせいで一騎打ちとなったが、自身の持てる最高の戦い方で勝利を収めた。

今まで何回教えても作戦をたてず、突撃に頼っていたリントンドが、はじめて俺の教えを実践し作戦を立ててくれた。

この前の事故で、ようやく突撃に頼らず、作戦をたてて相手を討ち取る事の大事さを学んでくれたようだ。

痛い目に合ってようやく自覚したようだ。

あいつはもともとその事さえ覚えれば、すぐにでも実践に出れるほどの腕を持っているのだ。

これでこんど来る彼らと会わせれば、お互いがさらに良い刺激になるだろう。

あいつが卒業してから活躍するのが今から楽しみだ。

### 3話

俺の初めてのKMFでの実戦であるあの模擬戦から今日で早くも2週間が過ぎた。

あの日から俺の生活は激変・・・することはなく、変わる事のない訓練生としての日常が続いていた。

そう、今日の朝までは・・・

事の起こりは教官から流された放送。

「訓練生は全員ただちに第一訓練場に集合」

この指示が出て、俺たち訓練生は駆け足で第一訓練場へと向かう。

この放送では具体的な内容が話されていなかったなので、俺たち訓練生は訳も解らぬまま訓練場に集まった。

訓練生全員が第一訓練場に集まって十分ほどすると、どこか見た事のある顔が二つ。背の高い金髪・美形の男が一人と、携帯をいじりながら暇そうにしている、へそだしスタイルのピンク色の髪の女の子が一人、教官の後についてやってきた。

その二人の登場に、訓練生は戸惑ったようにざわめく。

それは俺も同様だが、戸惑う理由が違う。

周りは見も知らぬ二人のために集められたこと、だが俺にとっては

この二人は知っている存在、もつとえばこの国の中核を担う存在となる二人なのだ。

まさかとは思ったがもう一度二人の姿を確認して確信する。

やはりあの二人なのだろう。

「諸君、このたび本国の各地にある3カ所の士官学校から、各1人づつ推薦し、有望なものをこの帝都ペンドラゴン士官学校に集め、その3人で1つの小隊を作り、徹底的なエリート教育を行うことを皇帝陛下から承った」

これも超実力主義であるブリタニア帝国の方針の一つなのか？

周りの生徒は「誰が選ばれるか」とか現在上位のやつは「俺に決まってる」とか言っている。

さらに前にいる二人が他校から選ばれた二人であると気づいたのか、ある者は金髪の男を見ながら「あいつかなりの美系だな」とか「どんなやつだろうな」とか、「ウホ、かわいがりのありそうない男」など言っていて、

ピンク髪の子のほうを見ている者は、「あんな子がナイトメア・フレームに乗れるのか？」とか「なんだあのいけない格好は、俺を挑発しているのか、へそだし萌えく、ハアハア」など言っている。

だがそれぞれ最後の発言をしたやつら、誰だ？

前の2人も身の危険を感じたのか、ビクツと体を震わし、周りをきよろきよろと見回している。

俺も変なやつが近づかないように心がけようと心に誓った。

教官が一言「うるさい！ 静かにしろ！」と注意すると何とか静かになった。

「まずこの2人に挨拶してもらおう」

すると、金髪の男が先に前に出てくる。

「私の名前はジノ・ヴァインベルグです、よろしくお願いします」

ジノがそう挨拶をすると、ピンク髪の女の子が続けて前に出てくる。

「アーニヤ・アールストレイム、よろしく」

そう挨拶すると、俺たちに携帯をむけカメラで撮影すると、満足そうにもとの位置に戻って行った。

アーニヤは確か取った写真をブログに載せたりしているので、この光景も載せたりするのだろうか？ というか教官もなんで怒らないのか？

そんな事を考えていると、再び教官が前に出てきた。

「それでは我が校から推薦するものを発表する」

教官の言葉を聞き取ろうと、周りの訓練生は一斉に耳を立て息を飲んだ。

その中で俺も少なからず緊張している。

「我が校からの推薦者は・・・レイス・リントだ」

俺は俺が選ばれた事に少なからずショックを受けた。

たしかにこの前の模擬戦でジャックに勝ち、2位の奴は負けたので俺が1位になっている。

だから選ばれたんだろう。

しかしそんな小隊に入ってしまったえば、訓練はより厳しくなり、卒業したら絶対に危険な所にしか投入されないに違いない。

そんな死亡フラグがたくさん立ちそうなところに入りたくなどない。周りのやつらは「俺の方が良いに決まっている！」などといっているが、変われるもんなら変わりたい。

「この決定に変更はない、もし文句を言ったら皇帝陛下に対する暴言として不敬罪になるぞ」

この一言で先ほどまで煩かったやつらも一斉に黙ってしまう。

もし仮に俺がこの決定を拒否しようものなら、国家反逆罪で捕まってしまうだろう。

俺は逃げ道などなく、この決定に従うしかなかった。

「では本日はこれで解散し、30分後から訓練を開始する。リント

ンドはこの場に残りこの2人に自己紹介でもして、この学校の中を案内してやれ。それが終わったらミーティングルームに集合だ。大体2時間後にはミーティングを始めたいからそれまでに案内を終わらせておけ」

「わかりました」と返事をして後のナイトオブラウンスとなる2人の方に近づいて行くことにする。

とりあえず集まった俺たち三人は改めて自己紹介しなおす事にした。

「はじめまして。北部士官学校から来たジノ・ヴァインベルグです。歳は14歳でヴァインベルグ家の四男です。気軽にジノと読んでくれるとありがたい。ナイトメア・フレイムは高機動戦で相手を叩き離脱するヒットアンドアウェイ的な戦いが得意です」

”ジノ・ヴァインベルグ”

彼は軍事帝国ブリタニアの最強の騎士ナイトオブラウンスのナンバ13であり、皇帝陛下直属の部下で、軍事におけるトップの1人といっても過言ではない。

現在の時点でも170cmも身長があり十分長身だ。

確かジノがR2のときに乗っていたナイトメア・フレイム”トリスタン”はその速度を生かした一撃離脱を得意とした可変型のナイトメアだったな。

ナイトメアモードのときはあの鶴嘴のようなMVSで敵の機体を切り裂いていたし、フォートレスモードのときはハーケンやハドロ

砲を用いた高速戦闘なので、近・中距離的な高機動戦闘が得意なんだろう。

変形するロボットは俺も大好きだったので”トリスタン”は俺のお気に入りだったロボットの一つだ。

ジノが一通り自己紹介を終えたようなので、アーニヤの方を見てどちらが先に自己紹介するか確認しようとしたら先に自己紹介すると合図が来たので、次はアーニヤの番となった。

「南部士官学校から来たアーニヤ・アールストレイム。12歳、射撃が得意。アーニヤでいい」

”アーニヤ・アールストレイム”

彼女もナイトオブブラウズの1人でナンバーは6。

最年少でラウンズ入りを果たした天才。

彼女のついていたナイトメア”モルドレッド”は全身に装備されたミサイルと両肩に装備されたシュタルクハドロンを使う超砲戦向けのナイトメア。

またブレイズルミナスを装備しているので防御力も高くまさに”動く砲台”だ。

アーニヤも自己紹介を終えたのでようやく俺の番がまわってきた。

「はじめまして、ジノ、アーニヤ。ついさっきこの学校の代表として紹介された、レイス・リントンドです。15歳で、近接戦が一番得意だけど、一様オールレンジで戦う事ができると思う。1番年上だけど敬語なんて使わなくていい、レイと読んでくれればいいよ」「

以前の俺ならば近接戦しか無理だが、今の俺ならオールレンジに対応することが出来る。」

と言うかこの二人と組むなら俺のポジションは必然的に中衛となってしまうから出来なければならない。

「じゃあレイ、早速この学校の中案内してくれよ！ アーニヤも行こうぜ」「

「わかったけどそんなに急ぐな、時間もあるしゆっくり行こう。ほら、アーニヤもおいで」

ジノは新しく来たこの学校の中がどんなものか早く見たいのか、親にせがむ子どものように俺の服の袖をひっぱってくる。

アーニヤも俺たちのあとを黙ってついて来ている。

中庭や屋上に連れて行くと、アーニヤが携帯で写真を撮っている。

「アーニヤは写真を撮るのが好きなのかい？」

俺がそう聞くと、アーニヤは黙って首を縦に振った。

今も携帯を弄っているが、こちらにも一定の注意を払ってくれてい

るのはありがたい。

無視されてないだけまだこちらも傷つかない。

「じゃあ俺たちがここに集まって小隊を組む事になった記念に、1枚写真を撮ろうぜ」

そうジノが提案してきたのでみんなで屋上で記念撮影をした。

俺とジノが両サイドに立ち、アーニヤを真ん中にして写真を撮ったが、ジノがアーニヤの頭に手を乗せると、アーニヤは鬱陶しそうに手を払うという光景が何回か続いたので、おれがジノにもう止めてやるように注意すると、ジノも止めてアーニヤも小さい声で「ありがとう」とお礼を言ってくれた。

次に訓練室に連れて行くと、さすがにこの2人も目が変わり、訓練を見ながら褒めたり、ダメ出しをして自分なりの評価をつけていた。(アーニヤは口にはしてないので予想ではあるが)

「レイ、お前から見てここのレベルはどうなんだ？」

ジノは興味津々で行った表情でこの訓練校のレベルを知りたがる。

アーニヤもこの話題には興味があるのか、携帯から目をこちらに向けている。

「うーん、みんな腕はあるけど、戦場で絶対的なエースとなれるよ。うなやつはいないな。普通より少し万能な兵士といったところかな」

「まあそんなもんか」

俺の答えにジノは少し残念そうに嘆き、アーニヤも興味を失ったのか、携帯に視線を戻した。

その後、保健室や資料室を案内した後、現在の時刻は12時前でミーティングまでまだ40分近く残っていたので食堂に向かい昼食を取る事にした。

「なあレイ、ここの食堂で一番おいしいものってなんだ？」

ここに着くころにはジノとは完全に打ち解けた、今は俺の肩に手を回しながら食堂のメニューを見渡している。

アーニヤとはまだ距離を感じるが、少なくとも嫌われていると言うことはないだろう・・・たぶん。

「基本的に何でも食べられるくらいの味は保障できるけど一つだけ頼まないほうがいい物がある」

俺の言葉にいつそう興味が増したのだろう、ジノは楽しそうな表情を見せる。

「なんだそれ？そんなにまずいのか？」

笑いながらそう尋ねるジノは、まるで新しいおもちゃを前にする子供のような。

「あの飲み物を頼んでいるやつを見たことないが、俺は絶対に頼みたくないし、飲みたくもない。お前も絶対頼まないほうがいいぞ」

何故メニューにのっているのかさえ謎であるそのメニュー。

恐らくは教官がごり押したのだろう。

「絶対と言われると余計に気になるな、よし俺はラーメン大盛りとそいつにするぜ」

勇者がここに存在した、俺は心の中でこの勇者に冥福を祈る。

「ジノ、俺は止めておけと言ったからな。アーニヤは何にする？」

俺は勇者、もといジノに最後の忠告を送ると、アーニヤにもメニューを尋ねる。

「サンドイッチとミルクティー」

メニューも見ずにそう答えるアーニヤ、恐らくは何処にでもあるメニューという事で選択したのだろう。

アーニヤの注文も聞いたので、俺が自分の分のカレーも合わせて食堂のおばちゃんに伝えると、10分後にはみんなの分のメニューがそろった。

ちなみに注文した時おばちゃんに珍獣でも見るかのような視線を向けられたのは、ここだけの記憶として留めておこう。

（ちなみにこの学校では食費は学校に払う授業料で一部が賄われ、残りは国の税金で支払ってくれるなんともありがたいシステムだ。）

俺とアーニヤの前にはそれぞれカレー、サンドイッチとミルクティ

ーが置かれ、ジノの前にはラーメンと水のようなものが置かれた。

「なんだよレイ、ただの水じゃないか、あんまり驚かすなよ」

ジノは油断した表情で目の前の液体を揺らしながら、俺に文句をつけてくる。

ジノの目の前に置かれた水、通称”気合ジュース”

これは以前、催眠ジュースと言ったが本当はそれだけではない。

あれを見た覚えが5回ほどあるが、毎回色が変わり、味も効果も毎回違う。

ただし一度だけ無色の物を見た事があるがあれを飲んだやつらは悲惨だった。

「ジノ、ここから一番近いトイレはあっちだ。あともしもの時のためにこれを持って行け」

そう行つて俺は事前に用意してもらつたビニール袋を手渡す。

「大げさだつて」

困つたように苦笑いを浮かべながら、それでも俺の手からビニール袋を受け取る。

「人の忠告を聞かないとこれから起こるような事になるからな」

俺がアーニヤの耳元でそう言つと、アーニヤも首をかしげながらも

頷いた。

それから各々が頼んだメニューを食べはじめた。

俺とジノは男と言うこともありややハイペースで、アーニヤは見た目から想像した通りゆっくりと食べている。

少し驚いたことは、このメニューは多くが男の訓練生と言うことでメニューは基本的に通常より大盛りで出される。そのメニューをアーニヤは残すことなく食べきったということだろう。

軍人は食べられる時に食べるということが必要とされる、ゆえにアーニヤもその術を覚えたのだろう。

ラーメンを食べ終えたジノは、何の警戒心も見せずに残されていたあのジュースを飲み込む。

「・・・なんだ、美味しいじゃないか」

脅かすなよ、そう言うジノはケタケタと笑っている。

しかし見る見るうちに顔色が悪くなり、遂には俺が渡したビニール袋片手に、先ほど教えておいたトイレへと駆けて行った。

アーニヤはジノの突然の豹変に目を丸くして、俺に理由をたずねてきた。

アーニヤに”気合ジュース”について説明すると、少し顔を青くしながら、小さな声でお礼を言ってきた。

ミーティングに向かう5分前に戻ってきたジノはまだ気持ち悪いのか顔色が悪い。

俺達の前に戻ってきたジノは、目に涙を浮かべながら忠告を聞かなかったことを謝ってきた。

そんなにひどい味だったのか？トラウマになってなければいいが。

ジノはこんな状態だが、遅れるわけにはいかないので、ジノの肩を支えながら、俺たち3人はミーティングルームへと向かった。

## 4話

あのジュースを飲んでしまい、苦しそうなジノを引きずりながら、俺たち3人は何とか時間通りにミーティングルームにやってくる事ができた。

部屋の中に入ると、パイロットコースの教官と、戦場からやってきましたと言わんばかりの顔をした男性が立っている、しかもその顔に見覚えもある。

「お前たちも知っているかもしれんが、こちらの方は我がブリタニア軍に所属しておられるアンドレアス・ダールトン將軍だ。このたびの小隊設立にともない、期間限定ではあるがお前たちを指導されることになった。ではダールトン將軍、一言お願いします」

”アンドレアス・ダールトン將軍”

ブリタニアの魔女”コーネリア・リ・ブリタニア”率いるコーネリア軍の將軍で、数多くの戦闘を経験して来たベテラン。軍務以外でもコーネリアを補佐する抜群の能力を持っており、実力のあるものは誰でも使うと言う実力主義者。

また率先して戦災孤児を引き取り、育てており、ダールトンと言う父の姿に尊敬し、ブリタニア軍に志願する子供は少なくない、その中でも才能を発揮することが出来た少数のエリートは、現在グラストンナイトと呼ばれる本国でも名の通った部隊に所属している。

グラストンナイトはとても優秀な部隊なのでこの人には、人に物を

教える才能もあるのだろう

しかし自分の仕える主の妹に撃たれ、自分の仕える主の義弟に操られ、自分の主に刃を向けさせられ、意識が戻ったらすぐに殺された、何とも不幸な役回りな人だった。

「うむ、私の名前はアンドレアス・ダールトンだ。このたび皇帝陛下より、今回設立する小隊のメンバーに技術指導を行うように仰せられた。私も軍務があるので、お前たちに教えてやる事ができるのは、長くても1〜2ヶ月程度しかない。教えてやれる時間は少ないが、精一杯学ぶべきことを学び、己の物とするように励め」

そう話すダールトンからは、長年戦場を生き抜いてきたことによる威圧感のようなものが発せられている。

俺たち三人もその姿に背筋が凍る錯覚を覚えるが、何とか気合で立ち続ける。

「Yes, My Lord」

腹から声を張り上げて返事をすると、ダールトンはやや困った顔を見せる。

「お前たちはまだ学生だから軍のような挨拶はいい。私もここでは軍の事は忘れてお前たちに教える事のできる事に集中する、お前たちも私をただの教官と思って接してくれれば良い」

ダールトンのその言葉に、俺たちは少し困った顔になる。

いくら俺たちが正式な軍人ではないとは言え、ブリタニアでも数少ない将軍に就いているその人物から気楽にしろと言われても、はいそうですかと素直に頷けるわけがない。

「しかしそれでよろしいのでしょうか？」

この中を代表して、俺がダールトン将軍に尋ねる。

「かまわん。本当は固いのは苦手なのだ」

そう言うとダールトン将軍は、俺達に苦笑いを浮かべた。

「わかりました。それではダールトン先生、今日からご指導のほどよろしく願います」

「「よろしく願います」」

俺の挨拶に続いてジノとアーニヤも挨拶をする。

「ああ、よろしくたのむ。さてお前たちの事は資料で見ているから自己紹介はいいが、ナイトメアの腕はやはり自分の目で確かめないとわからん。お前たちには3日後この学校にいる他の生徒たちに協力してもらい、三人小隊5組を同時に相手にしてもらおう。今回は実機を使い、模擬弾を使用する。それまでにお前たちはフォーメーションを考えたり、連携を確認しろ。その試合を見てお前たちに足りないものを見分け、今後の課題とするので、しっかりと頑張るように」

「「「わかりました」」」

ダールトンの指示を受け、俺たちはそう返事を返す。

「では私は書類仕事があるので次に会うのは3日後になるだろう。それまでお前たちに教えてやる事ができないが、お前たちそれぞれの力を見る機会でもある。今回はお前たち3人自身の力に任せる事にしよう。では3日後にまた会おう、健闘を祈る」

そう言つてダールトン将軍は部屋を出て行つた。

「レイ見たか、本物の将軍が俺たちに指導してくれるんだぜ、これは燃えてくるよな！」

「私もそう思う。これはいいチャンス、だからがんばる」

ジノは先ほどまで青い顔をしていたのに、いつの間にか回復して、かなり興奮している。

アーニヤも本物の将軍の指導を受けられることが本当につれいようでいつもよりも表情が豊かだ。

「ああそうだな、せっかくあのダールトン将軍に教わる事ができるチャンスなんだから、教えてもらえる事は全て自分のものにしなないとな」

そんな話を話し合いながら俺たちは作戦を考えて、とりあえず決まった事は前衛ジノ、中衛俺、後衛アーニヤで、真ん中の俺が指示を出しながら敵ナイトメアを撃破していく事になる。

それから3日間は連携を確認しながら、俺が思った事やジノやアーニヤが気づいたことなどを話し合つて、連携を深めていった。

私は今回小隊の教官を務める事になった。

手元に届いた資料に目を通したが、パイロットの腕だけなら今すぐ  
実践に出しても問題はなく戦えるだろう。

ジノ・ヴァインベルグ

高速戦闘による近接戦が得意。

しかしスタンドプレイに走る傾向があり、陣形を崩すこともしばし  
ば。

アーニャ・アールストレイム

遠距離からの射撃の腕は一級品。

しかし援護射撃など周りへの注意が散漫。

レイス・リントンド

以前は突撃癖がひどかったが、最近は少しまわりを見ながら戦うよ

うになった。

しかし少し自身を軽く見る傾向があり、自身をおとりに立てるような作戦が多く見られる。

このデータを見るに彼らには周りと連携して敵を倒すという事の大事がわかっていないようだ

このまま戦場に出してしまつたら、遠くないうちに撃墜されてしまふかもしれない。

だから私は今度の模擬戦でそれを理解してもらつために、彼らには悪いが、少し痛い目を見てもらおう。

模擬戦が開始してから10分、戦局は好ましくない。

戦力差は5倍ほどあったが、俺たち3人ならこの差を覆すことができると思つていた。

しかし今回ははっきり言つておかしすぎる。

訓練生とは思えない彼らの動きに、俺はもちろんジノやアーニヤも戸惑っている。

3日前に見た彼らの訓練の動きとは明らかに違うのだ。

いや、動きだけならあまり変わりはない、ちがうのはその動きが非常に統率されているということだ。

まるで本物の軍隊の中で指揮されているような動きだ。

何とか俺が3機、ジノとアーニヤが2機ずつ落としたが、それでもまだまだ相手の攻撃の手は緩まず、数が減ったところはお互いが穴を埋めあうなど統率も取れている。

学生の力でこんな統率力を持つ人間はいない。

だがこの学校には1人それを行う事のできる人間が来ている。

俺たちの指導教官”アンドレアス・ダールトン将軍”

「ジノ、アーニヤ、一時後退する。おそらく相手の指揮を執っているのはダールトン将軍だ。このまま戦っても俺たちに勝ち目はない、いずれ落とされてしまう。ポイントA-23で相手を迎え撃つことにしよう」

俺は二人に指示を送ると、ライフルで敵を牽制しながら、緩やかに後退を始める。

「了解、しかし相手がダールトン将軍ならそう簡単に後退などさしてくれないんじゃないか？」

同様にジノも後退を始めながら、俺にそう尋ねてくる。

後ろからアーニヤも俺たちが下がりやすいように援護をして  
いるが、なかなか敵も喰らいついて来る。

このままでは本当に捕まってしまつ、この戦況を覆すならいま  
しかない・・・か。

「ジノ、アーニヤ、俺が昨日考えたあのフォーメーション実戦で  
してみないか？」

その言葉を聞いて、ジノもアーニヤも苦戦しているにもかかわらず、  
楽しそうに笑う。

「あれを今やるのか？ まあ戦況を変えるならあれは有効だと思  
つが」

「やろう、やらなかったらそれで終わり」

「まあ、アーニヤもそういうならやってみるか。よしレイ、アーニ  
ヤやろうぜ」

二人も俺の意見に賛同してくれるみたいだ、それなら全力でこの戦  
場を暴れ回ろう。

「じゃあ今は全力で後退だ。俺が前に出て退路を切り開くからジノ  
は俺の後ろでサポートしてくれ、あくまでも撤退が目的だから無理  
に相手に傷をつける必要はない。アーニヤは援護しながら俺たちの  
後に続いてくれ、アーニヤも敵の撃墜は考えないで、敵の足止めを  
目的に援護してくれ」

「了解」

二人に合図を出して敵の作り出した包囲網の一番薄い所に突撃を仕掛ける。

そこにいる敵機はアサルトライフルで迎撃してくるが、俺はそれがかわしきると、すれ違い様に敵の腹にランスをぶつける。

撃墜判定の出たその機体には目もくれず、別の機体からの攻撃から逃れるように一目散にそこから離脱する。

俺の開いたその穴から2人も包囲網を潜り抜け、俺たちは目的地であるA-23へと機体を進めた。

私は司令部からこの模擬戦の指揮を執りながら、レイス・ジノ・アーニヤの3人の動きを見ていた。

データから予想していた動きとは違い、三人の動きは連携がとれていた。

更に動きを見ていて感じたのは、1年戦場で生きぬく事ができたら、エースになれる実力を三人とも持っている。

しかし今のままでは1年生き残る事ができないと考え、周りとの連携を取る事をこの模擬戦で覚えてもらおうと考えていたのだが、すでに彼らは自分たちでその事を学んでいたらしい。

まだまだ甘いが少しづつ連携がとれてきている。

若者が一歩一歩成長していくのは、教える側としてもとても嬉しい。

私は自分が教えた子を本当の自分の子のように可愛く思えてしまう。

だから彼らが活躍すれば本当に嬉しいし、彼らが戦死してしまえば本当に悲しみに涙する。

本来なら彼らのような若者を戦場に出したくないのだが、この国では彼らでも実力さえあれば戦場に赴く。それならせめて私が教える事のできる子たちには、私の持てる全てを授けてやろうと思う。

少し感慨にふけてしまったようだ、そろそろ指揮に集中しよう。

どうやらそろそろ私が指揮を執っているのに気づいたらしい。

守りの薄い所に突撃をかけて、後退して行った。

本来なら追撃をかけさせるところなのだが、何か考えがあるみたいなのであえて素直に後退させて、こちらも体勢を立て直す事にした。

どんな手で来るのかわからないが、今から楽しみだ。

目的のA-23にたどり着いた俺たちは、敵が来る前に現状の確認を行う。

先ほどの後退の時に運よく敵機を1機落とす事ができた、これで相手の残りは7機。

しかしこちらも少なからず損傷を受けていて、俺もジノもアーニヤも機体に小破判定が出ている。

時間をかけられれば、こちらはどんどん不利になっていく。

そのために攻めるなら今しかない、そのための策はある。

俺たちの基本フォーメーションは前・中・後衛の3人が一列に並ぶ体系だが、今回試すのは俺とジノが前衛に出てアーニヤが後衛から援護射撃で俺たちの突撃をアシストするというフォーメーションだ。

アーニヤには援護の効率を上げるために、両手に2丁のアサルトライフルを持ってもらうのだが、出来ないかなと思っていたが、アーニヤが昨日シミュレーターで実験してみたところ、いとも簡単そうにやり遂げてしまった。

これが後のラウンズの腕前か！ と驚いたが、ジノも出来るとは思っていなかったらしく、開いた口がふさがらないようだった。

(ちなみにこのときジノの口の中になぜか手に持っていた激カラと

書かれた鉛玉を投入し反応を待つと、悲鳴を上げて水を求めて走り去って行った。さらにいつのまにかシミュレーターから降りていたアーニヤはその光景を携帯に収めており、満足そうに携帯をいじっていた。）

そしてこのフォーメーション、シミュレーターで試したが、アーニヤの射撃によりかく乱された敵をジノと俺が突撃して撃破するのだが学生程度の腕でとめる事はまずできない。

まずアーニヤの射撃が正確すぎてそれ自体で敵を撃破できるし、俺とジノの突撃も並みの学生パイロットでは止められないので、このフォーメーションは突破力が半端ではないはず。

やがて敵機が俺たちの前に現れる。

向こうは三機づつに纏まり、残る一機はやや離れたところで待機している。

「行くぞ」

俺の合図でジノと俺は機体を進める。

アーニヤは前に行く俺たちの隙間から、的確な射撃で相手を牽制する。

いや、牽制と言うには正確すぎる射撃は、相手の陣形に綻びを生ませる。

その綻びを見逃さず、俺とジノはそこを食い破らんと突撃する。

わずかに突出した一機目掛け、まずはジノが先行する。

ジノの得意な戦法は高速機動からの一撃離脱、ランスをその機体に突き刺さんと突撃する。

その攻撃を命からがら逃れたその機体は、しかし決定的な隙を見せていた。

そのわずかあとに迫っていたレイスにとって、その隙は致命的なもので、隙だらけのその機体にスタントンフアーを喰らわせた。

その攻撃をもろに受けた機体は何も出来ず撃墜され、俺はその機体には目もくれずに次の機体に迫っていた。

次の機体は先行していたジノに気をとられて隙だらけ、すぐさまその間合いを詰めた俺は再びスタントンフアーをお見舞いする。

そしてジノとスイッチ、今度は俺が敵の注意を引きつけると、ジノがその隙を逃さず・・・と思いきや、ジノが倒す前にアーニヤの射撃が敵を捉える。

「ちよ！ そりゃねえぜ」

そう叫びながらも、ジノは次の機体へと向かっている。

残された三機も俺が一機、ジノが二機、そして後方に待機していた機体は抗うことも出来ずにアーニヤに落とされた。

気づけば5分も経たないうちに、俺たちは敵を全滅させていた。

さすがに俺たちもこの結果は予想していなかった。もう少し相手が粘ると思ってんだけど、あまりにあっさりと勝ってしまった。

模擬戦終了が告げられると、俺たちは機体から降りる。

ジノとアーニヤはすぐさま俺の元に駆け寄ってきて、勝利の興奮を分かち合う。

「やったぜレイ、俺たち最高のチームだな！」

ジノの言葉にアーニヤも無言で頷いている。

だが俺たちの興奮が覚めやらぬ間に、俺たちはダールトン将軍に呼び出される。

「まずはお前達、良くやったな」

ダールトン将軍は俺たち一人一人の肩を叩きながら賞賛の言葉を告げる。

俺たちも返礼の言葉を告げようとするが、ダールトン将軍が片手で制す。

「お前たちとりあえずしばらくはあのフォーメーション使用禁止だ。学生たちでは相手にならないからな」

ダールトン将軍の突然の言葉に俺たちは困惑する。

「確かにあのフォーメーションの有効性は予想外でしたが、使用禁止されては訓練にならないのですが？」

俺の質問にジノとアーニヤも同意見のようでダールトン将軍の方を見ている。

「今回お前たちも気づいたかもしれないが、私が指揮を執っていた。もちろんそれには当然理由がある。お前たちは個人個人の能力はずば抜けたものがある、しかしそのせいか少し連携が疎かなところがあったのだ。それを理解させるために今回の模擬戦を組んだのだが、あのフォーメーションは学生相手には酷だ、それにお前たちの連携を鍛えるのに支障をきたす。なに、1ヶ月後にはお前たちにも今の違いがすぐにわかる位まで鍛え上げてやる。だから今はあのフォーメーションの使用を禁止しておく。そして残りの1ヶ月であのフォーメーションを完成させればいい。わかったか」

ダールトンのその説明は納得の行く物で、俺たちがこれを反対する理由はない。

「「「わかりました」「」」

俺たちの返事に満足したのだろう、ダールトンは一つ頷くと最後の言葉を告げる。

「では今日は今回の模擬戦のレポートをつくって提出するように。それが終わったら解散してかまわないぞ」

「「「はい」「」」

俺たちはこの後3人で今回の反省点を話し合いながらレポートを纏めた。

そしてそれを提出すると、寮へと戻っていったのだった。

才能と言うものは恐ろしいな、私の戦略を戦術で破られてしまった。

三人から提出されたレポートを見るに、あのフォーメーションを考えたのはレイスのやつだろうだ。

レイスに限らず、彼らには人を率いて戦う指揮官としての才能もあるのだろう。

彼らならいずれ帝国最強の騎士、ナイトオブブラウズにもなれるかもしれない。

そう考えはじめると、2年後3年後の彼らの姿が今から楽しみになってくる。

だがそれはまだ先の話、今彼らに必要なのは生き残るために必要な力を磨かせること。

そのためにも今は私が教えてやれる事を叩きこんでやろう。

手始めに明日からの訓練では地獄を見てもらおう。

## 5話

あの模擬戦からはや1ヶ月半、この間の訓練を一言で表すと地獄だった。

朝8時に訓練室に集合して、そこから昼までは実機で連携の練習をし、小隊の錬度を上げるための訓練を行う。

昼食をはさみ、ダールトン將軍の戦略学を2時間叩きこまれる。

その後は今習った戦略学を実践するために俺たち小隊は一時解散して、それぞれの訓練生に協力してもらい、3人小隊や5人小隊の指揮をしてジノやアーニヤと戦ったり、ダールトン將軍が指揮する小隊と戦ったりし、訓練が終わるのは午後6時。

慣れとは恐ろしい物で、最初の方は死ぬんではないかと思うほどに疲弊していたが、その訓練を2週間も続けるとその訓練に慣れていく自分には驚かされた。

そして1ヶ月経つと、ついに新フォーメーションの使用禁止が解禁された。そのため試しにと一度模擬戦の中で使ってみると、前回との違いが驚くほどすぐにわかった。

違いを一言で言うならば、二人の動きが手に取るようにわかるということだろう。

ジノがどのタイミングでどのように突撃しようと考え、アーニヤがどのように援護してくれているのかが簡単に予測でき、おれ自身が以前と比べて格段に動きやすい。

ジノとアーニヤも俺と同じようなことを感じていたようで、二人も驚きの声を上げている。

その他にもジノがメインの陣形、アーニヤがメインの陣形、俺がメインの陣形、その他にもさまざまな状況を考え、いくつか新しいフォーメーションを試したりして、半月を過ごしてきた。

この期間は実に内容の濃い1ヶ月半だった。

そして今日も同じ訓練が始まると思って訓練にやってきたのだが、今日は何か空気が違う。

学校全体にどこかピリピリとした空気が流れており、教官達は慌てた様子で動き回っている。

俺たちはそれを不思議に思いながらも、訓練を開始した。

しかしどうしても気になり、訓練に集中できず、ダールトン将軍に尋ねてみる事にした。

ダールトン将軍も俺たちの動きを見て、精彩を書いている事を感じたのだろう。

訓練を一時中断し、俺達に事情を説明してくれた。

どうも今日は軍の方から視察が来るらしく、そのせいで教官たちもピリピリしているらしい。

しかも査定の内容いかんではクビもかかっているので、相当張り詰

めているようだ。

まあ俺たちには関係ないのでいつも通りに訓練が再開される事になった。

それからはいつもとどおりの訓練が行われ、俺たちが午前の訓練を終え、いったんミーティングルームに集合する。

するとそこにはダールトン將軍以外にもう1人、この学校では見慣れない人物が待ち受けていた。

その人物は服装からブリタニア軍人である事がわかる。

しかし身に纏うは一般の軍人が着る軍服ではなく専用の制服、皇帝直々に下賜されたマントは着てはいないが、それでもその身から発せられるオーラはダールトン將軍から感じたものと同様、いや、それ以上かもしれない。

俺たちの前にはナイトオブブラウズの1人、ノネット・エニアグラムその人が待ち構えていた。

”ノネット・エニアグラム”

ナイトオブブラウズの1人でナンバー9。

気さくで明るい女性で後輩の面倒見がよく、ゲームではグロースターでランスロットに乗ったスザクと、この時は専用機を持ってはいなかったがライ、その二人を相手にして圧倒するほどのナイトメア操縦技術を持っている。

また、ブリタニアの第二皇女であり、コーネリア軍に所属するダールトン將軍の直屬の上司、コーネリア・リ・ブリタニアの軍学校の先輩でもあり、親友である。

しかし彼女の専用ナイトメアは結局最後まで出てこなかったため、彼女がどのようなコンセプトを持った専用機を所有しているかなどは不明。

俺の後ろに続くように入ってきたジノは、目の前に現れた超大物に驚き、来る途中に飲みかけていた水を盛大に吹き出した。

少し俺にもかかってしまったので、さりげなく拭いておく。

アーニヤも目を丸くして、いじっていた携帯を手から落としている。

「ダールトン先生、そこにいらっしやるのはラウンズのノネット・エニアグラム卿でありますよね？」

俺の質問にジノとアーニヤも同意見のようで、ダールトン將軍の方を向いている。

ダールトン將軍は一つ咳払いを行うと、静かに話を始める。

「そうだ、こちらはラウンズのエニアグラム卿だ」

ダールトン將軍の紹介に応じるように、エニアグラム卿はこちらにこりと微笑みかける。

「なぜラウンズの方がこちらにいらっしやるのですか？ ラウンズのメンバーは確か本国に残られている数名以外は、EUとの戦闘で前線にいらっしやると思っていたのですが？」

そう現在我がブリタニア軍はEUと戦争を開始している。

そのためにラウンズは皇帝陛下の護衛として最低限の人数しか本国に残っておらず、そのラウンズも実際は本国防衛のための任務についているはずなのである。

「ああ、その質問には私が答えよう、皇帝陛下からお前たち三人の力量をみて報告するように言われているのだ。それでもし即戦力になるようなら、特例としてお前たち3人をブリタニア軍に入隊させて、現在戦闘を行っているEU方面の軍に配属させるとの事だ。そこでダールトン將軍と話し合ったのだが、何事も経験だ、お前たちには早速ブリタニア軍に入ってもらって戦場で活躍してもらおう」

エニアグラム卿はそう告げると、目を鋭くして俺たちを見渡す。

俺たちもあまりに突然のことに、緊張で動けない。

ジノかアーニヤがつばを飲み込んだのだろう、あまりに静かなこの部屋ではその音も五月蠅く感じた。

「だが、私自身お前達の実力をじかに感じてみたい。ということ、今からお前達と一対一の模擬戦を行いたいと思う」

突然の宣告に俺たち三人は言葉を失う。

ラウンズと模擬戦？ そんな贅沢な訓練は一生軍に所属し続けてい

てもめぐり合えるものではない。

その事に喜びを隠せないのだろう、ジノは身体を震わせながら喜びの声をあげる。

アーニヤは無表情だが、模擬戦をするのに異論はないのである。

俺はというと困惑を隠せない。

たしかに自分の実力を確かめるのにこれほどの相手はいないだろう。

だが俺たちはこれから最も危険な場所に配属されると聞かされて、落ち着いてなどいられない。

「それでは早速はじめたいと思うので、お前達も自分の機体を用意しに行け」

それだけ言うと、エニアグラム卿は部屋から出て言った。

「よっしゃ、レイ、アーニヤ、俺たちで功績をたてて早く戦争を終わらせようぜ！」

ジノは張り切った様子で俺達に声をかける、ジノの心の中では使命感であふれているのだろう。

しかし現実問題、俺たち3人が出たぐらいで戦局が変わるならその前に戦争は終結するはずだ。

「うん、頑張る。レイもジノも一緒に頑張ろう」

だが、珍しくアーニヤも決意を秘めた顔でそう答えている。

アーニヤ、そんなこと言われたら頑張らないわけにはいかないじゃないか。

「ああ、俺たちで戦争を終結させるぐらいの意気込みでいこう」

この二人がやる気になっているのに、俺だけがビビっているわけにも行かない。

俺も覚悟を決めよう、こうなったら必死に戦って生き残るしかない。

人と殺しあう覚悟がないわけではないが、やらなければならない。

相手も軍人なんだ、情けなんてかけられない。

「まずはエニアグラム卿に一泡吹かせてやろうぜ」

「おう！」

俺の言葉に、二人も拳を握って答える。

「その意気だ、私がお前たちに教えてやれる事は全て教えた。これからはしばらくの間、お前達はエニアグラム卿の指揮下に入る。これからは卿の指示に従って行動するように。私はコーネリア様の軍に戻らなければならないので、お前たちとは戦場が違う戦場に立つことになる。だが、その地でお前たちの無事と活躍を期待している。また会ったときには飯でも食べにいこう、私がおごってやる。その時までお前たちはしっかりと生き残れよ」

ダールトン将軍、あなたはいい人だ。こんな中でも唯一俺たちの心配をしてくれている。

絶対に生き残ってご飯と一緒に食べにいこう！

「ダールトン先生、いえダールトン将軍、短い間でしたがご指導いただきありがとうございます。絶対に生き残って将軍の元に会いに行きます。覚悟しててください。もう止めてくれと言われるまで食べまくります」

俺の言葉に苦笑いを浮かべながらも、ダールトン将軍は嫌そうな顔一つ見せない。

「ハハッ、楽しみにしておく、ではその時までお別れだ、お前たちの健闘を祈る」

「……ありがとうございます！」「……」

俺たちの礼を聞いて、ダールトン将軍部屋から出て行った。

俺の目の前にはエニアグラム卿の乗ったグラスゴー、己の実力で勝負するために搭乗する機体はお互いに同じである。

だが目前のグラスゴーからは、機械とは思えないプレッシャーがひしひしと伝わってくる。

俺は機体の最終確認を行いながら、どう攻めるべきか考える。

相手はラウンズ、守りに入ったらこちらにチャンスなど来ないだろう。

しかし、向こうも簡単に隙など見せてはくれないはず。

と言うことはやはりこちらから攻めるしかない。

「それでは両機とも準備はよろしいでしょうか？」

オペレーターからそう通信が入る。

「こちらはいつでもOKだ」

ニアグラム卿はすぐにそう答えると、KMFはこちらに向けて構える。

「こちらも問題ありません、はじめてください」

俺がそう答えると、少しの時間を空けて、オペレーターは戦闘の開始を宣言する。

開始の合図と同時に俺は機体を前進させる。

と、同時にスラッシュハーケンを2つとも射出し、相手の様子を伺

う。

目前の敵は最低限の動きで片方をかわし、もう片方はトンファーで弾き飛ばす。

かわされることなど想定済み、俺はハーケンを巻き取りながらスタントンファーで襲いかかる。

その攻撃も機体をわずかに後退させるだけでかわし、二発、三発と攻撃を繰り返すが、全てかわされる。

そして四発目と攻撃を繰り返そうとして、背筋にぞっとした感じをうけて横に緊急回避する。

すると、機体のカメラには、俺が攻撃を繰り返そうとしていた右手に合わせるように、ハーケンが射出されている。

体勢を立て直すためにその場を離れようとするが、エニアグラム卿からの追撃はなく、こちらに機体を向けたまま沈黙している。

あくまでも俺に攻めさせてくれるつもりなのだろうか。

次は攻めを変えてみよう、そう考えた俺は武装をアサルトライフルに変更して射撃を開始する。

エニアグラム卿は回避行動を取りながら同じくライフルを手取る。

お互いに回避しながらの撃ち合いなのだが、射撃の正確さが違う。

こちらは向こうの後を追うのに必死で、全然照準が定められない。

しかし向こうは、こちらの動きを読んでいるかのように、動く先に射撃が行われる。

今は回避しているが、これを続けていても勝ち目はない。

俺はライフルの射程距離から逃れると、ライフルを直す。

するとエニアグラム卿ももう必要ないとばかりに、ライフルを手放した。

やはり望みがあるのは得意である接近戦。

再び接近してトンファアを繰り出す、更に今度はハーケンを同時に射出させるが、その動きも読んでいたのだろう。

トンファアは止められ、ハーケンはハーケンをぶつけて相殺すると言っ離れ業をやったのけられた。

これには焦るが、もう一方のトンファアを繰り出し、止められる。

ハーケンは射出済み、両者手詰まりか・・・と思いきや、敵は更に機体を前進させ、突進してくる。

慌てて機体を後退させるが、後手に回った分動きが遅れ、突進を喰らってしまう。

バランスを崩した俺の機体は転倒し、目前にはトンファアを向けた敵機がこちらを見下ろしている。

「そこまで、エニアグラム卿の勝利です」

オペレーターのその言葉に、相手はトンファーを引いて少し離れて行く。

俺は倒れた機体を起き上がらせると、急いでその場を離れる。

すぐに次の模擬戦が開始されるからだ。

次の相手はジノ、その次はアーニヤの順番だ。

結局二人も勝つことは出来なかった。

ジノは得意の一撃離脱を行いながら、チャンスをつかっていたが、最後は見事なまでのカウンターを決められ撃沈。

アーニヤも距離をとりながら射撃で戦ったが、それをかわされ、最後には接近して来た相手に武器を弾き飛ばされる形で敗北を認めた。ミーティングルームに戻った俺たち三人は、ほとんど良い所のなかったことに意気消沈していた。

「お前達、ご苦労だったな」

部屋に入ってきたエニアグラム卿はそう言うと俺たちを激励する。

だが、負けた俺達にとってはそのような言葉は耳に入らない。

その様子を察したのか、彼女は静かに語りだした。

「この模擬戦はお前たちより上がいると言っことをわからせたかった。戦場では油断、慢心は最大の敵となる。そうなる前にお前たちに思い知らせる必要があつたんだ」

その言葉に俺たちも顔を上げる。

「私は今まで多くの仲間が散って行く所を見てきた。その中には百戦錬磨の大ベテランもいた。彼は油断などしていなかったし慢心もしていなかった。それでも死ぬ時は死ぬんだ。戦場に出てからでは遅い。だから少しでも早くそれを取り除く必要があつたんだ」

その言葉を受け、俺たちも少なからずその思いを理解する。

確かにどこか油断や慢心と言う気持ちがあつたのかもしれない。

「これだけは言っておく、お前達は十分強い！　だが、戦場では油断が命取りだ。だから己を磨き続ける、そして生き残り続ける！　解つたか！？」

「Yes, my lord!」

俺たちは力強く答えた、そしてそれを見て彼女も優しく微笑んでくれた。

「お前たちは明後日までに荷物をまとめておけ。お前たちはとりあえず私の指揮下に入ってもらふ事になる。明後日に私が迎えに来るので、そのままEUの方に向かう」

「Yes, My Lord」

こうして学生生活が終わり、軍人としての新たな生活がスタートする事になった。

私は皇帝陛下に命令され、士官学校へと赴いている。

なんでも今ここで訓練している3人を見て使えるようなら、EU攻略に連れて行けとの事だ。

私は学生など連れて行けるわけないと考えながらも、ひとまず現在彼らの指導教官をしているダールトン將軍の元へと向かった。

彼は突然の来訪に驚きながらも、こちらの目的を告げると、少し残念そうな表情を見せながらもデータを渡して貰った。

それに目を通しながら、ちょうど眼前で繰り広げられた訓練にも目を向ける。

そこに映った光景を見て、私は目を疑った。

彼らの連携の訓練を見て、こいつらほんとに学生か？と思った。

訓練生のときから様々な人間を見てきたが、この三人はすでにその標準を大きく越えている。

個人個人の腕なら今でも上には多くの人間がいるだろう。

だが私がラウンズになってから、ここまで連携が取れているチームを見るのは、久しぶりのことだ。

おそらく彼らの実力はすでに準エース級のものだろう。

將軍も同意見のようで、彼らを戦場に出すのはまだ早い気もするが、これほどの腕前なら戦争終結を少しだけでも早く出来るかもしれない。

彼らのもっとも得意なフォーメーションの映像を見せてもらったが、私の中の武人の血がたぎってくる。

本来なら軍に配属されるのだが、ラウンズ権限で私の部隊に配属することにしよう。

それに彼らには大事なことを教えてやらないとな、そのためには模擬戦を行うのが一番。

その旨を告げると、ダールトン將軍は呆れた表情を浮かべながらもあなたの配下にするのなら私が文句を言う筋合いはありません、と言われる。

そして彼ら三人をよろしく頼みます、と頭を下げると、彼はそれ以上何も告げなかった。

彼ほどの武人から頭を下げられたのだ、その願いを反故にするわけにはいかない。

私は彼らが生き残り続けるように、最善を尽くすことを心に誓うのだった。

## 外伝

ダールトン将軍が俺たちの指導教官に就任し、訓練がスタートしてから2週間、朝から訓練のために準備をしていると、学校から支給されている端末にダールトン将軍から連絡が入る。

「本日の訓練は中止する。訓練ばかりではお前たちも息が詰まるだろう、今日は気分をリフレッシュして身体を休めるがいい」

それだけ伝えると、ダールトン将軍は通信を終了した。

突然のことだが今日1日休みをもらえる事になった、しかし急に休みを与えられても何をすればいいかわからない。

突然もらった休みに何をしようか考えていると、ジノが3人で遊びにいこうと誘ってきた。

「レイ、せっかくだからアーニヤも誘って、街にでも行って思い切り遊ぼうぜ」

ジノはすでに遊びに行くつもりなのだろう、訓練用の服を脱ぎ散らかして、外出用の服を選んでいる。

「遊びに行くのはいいけど何しにいくんだ？」

遊びに行くのは構わないが、何をしたいのだろうか。

「俺はほとんど屋敷の中から出してもらえなかったから、庶民がどんな生活をして、どんな風に遊ぶのかしらないんだ。だから色んな

物を見てまわりたいな！」

そうだった、ジノとアーニヤの2人両方ともが貴族の家の出身だ。

俺は平民だから貴族の生活がどんなものかわからないから、それを知りたいというのと同じ事なのだろう。

「じゃあアーニヤにも連絡して、今から30分後に正門前に集合でいいだろ」

アーニヤに遊びに行こうと言うメールを送ると、2分と経たぬうちに了承のメールが返信されてきた。

これでアーニヤの了解も取れたので、俺も出かけるための準備を始める。

「なあレイ、庶民って普段何して遊ぶんだい？」

すでにほとんど準備を終わらせていたジノが横から話しかけてくる。

「遊ぶにも色々あるが、まあ一般的にはゲームセンターに行ったり、カラオケやボーリングに行ったり、ファーストフード店でご飯食べながら、お喋りするぐらいかな」

それ以外にもスポーツをして遊ぶと言う選択肢もあるだろうが、3人では数が少なすぎて出来ない。

少なくとも今の人数の倍は集めないとダメだろう。

「へえ、さつきも言ったけど俺ほとんど屋敷の中で生活してたん

だ。家庭教師がいたから学校にも行つてなかつたし、少しでも外の世界が見たかったから、親の反対を押し切って士官学校に入ったんだ。でもなんかまわりと話が合わなくて少し浮いていた俺に今回の選抜の話がきて、ここに来てレイと会えることができたから、本当によかつたんだ」

ジノの話を黙って聞いていると、貴族の子どもも庶民とは違った悩みがあるんだなと思う。

「ジノ、俺はお前とアーニヤと知り合えてよかつたと思ってるし、俺はお前とアーニヤとずっと友達だし、仲間だし、最高のライバルでいるつもりだよ」

「当たり前だろ、俺もそのつもりだぜ！」

ジノは俺の言葉を聞くと、そう言って俺の肩に手を伸ばして肩を組んでくる。

そんな話をしながら準備を整え、予定より少し早く正門前に向かうと、アーニヤはすでに到着していて、携帯をいじりながら、俺たちを待っていた。

「ごめん、アーニヤ遅くなった」

「大丈夫、私も今来たところ」

俺が謝罪をすると、アーニヤはそう返事をしてくれた。まるで付き合っているカップルのようなやり取りだなと思って少し笑みがこぼれる。

アーニヤは何で俺が笑ったのかわからず、その事を尋ねてきたので、今思った事を説明すると少し照れたようで、アーニヤの顔が少し赤くなる。

このままここにいても仕方ないので俺たちは街に向かう事にした。

「ジノとはさつき話したんだけど、アーニヤはどこか行きたいところある？」

俺の問いかけに、アーニヤは首を振って答える。

「特にない、レイに任せる」

任せると言われたが、どこに連れて行こうか？

カラオケでもいいが、最近ナイトメアの訓練やダールトン將軍の戦術の講義ばかりで、体全体を思い切り動かしてないな、それならボーリングで運動しながらストレスを発散しよう。

「よし、じゃあボーリングに行こうか？」

ボーリングに向かうと言う俺の提案に、二人はそれで構わないという。

なので俺たちは近場のボーリング場に向かう事にした。

ボーリング場に到着した俺たちは周りをきよるきよると見渡すジノを強引に引っ張り、俺が代表して受付をすませる。

俺達にあてがわれたレーンに移動すると、ふと疑問に思った事を聞

いてみる事にする。

「ところで2人はボーリングってどんなものか知ってる？」

「知らない」

やはりこの2人はボーリングの事を知らなかったようだ。

そのため、ゲームを開始する前に二人に投げ方や基本的なルールなど簡単な説明を行う。

それを伝えると、二人もとりあえず1回やってみようという事になり、まず俺がお手本として投げる事になる。

「あんまり上手くないから期待するなよ！」

俺もボーリングは久しぶりなので、とりあえずハードルを下げてくださいのために釘を刺しておく。

「レイがそう言う時は大抵俺たちの期待を裏切らないから大丈夫だぜ、なあアーニャ？」

「そう、レイなら大丈夫」

二人にそう言われ、下げようとしたハードルはむしろ跳ね上がったと行っても良い。

どれだけ俺に期待しているんだ、と考えながら、ボールをピンに向かって投げると、ボールは想像通りの軌道を描き、見事全てのピンを倒してストライクとなった。

それには思わず二人の方に振り返り、ガッツポーズを見せる。

「ほら、やっぱりレイは上手いじゃないか！」

「ほんとう、上手」

2人がそう褒めてくれるので、素直に「ありがとう」と返答しておいた。

俺に次に投げるのはジノ、ジノは俺の教えた通りのフォームで投球する・・・が、無駄なところに力を入れすぎているのか、ボールはレーンの半分辺りでガターゾーンに落ちてしまった。

ボールの行方を見ながら、悔しそうに自分の膝を叩くジノ。

「力みすぎ、もう少しコントロールして投げるといいよ」

俺がジノにそうアドバイスを送ると、ジノも素直に頷いて、二球目を投じる。

先ほどよりコントロールされて投げられたボールは、今度は最後までレーンの上を走り続け、5本のピンを倒していった。

たった5本だが、ピンをはじめ倒したジノは大はしゃぎで喜ぶ。

その光景は周りの注目を集め、ジノは少しの恥ずかしさも見せずにこっちに戻ってくる。

自分が注目されることに慣れていいのか、無頓着なのか、それは解

らないが一緒にいるこちらが恥ずかしくなる。

次に投げるのはアーニヤ、彼女は普通の女の子では持つのも苦勞するであろう重さのボールを抱えて、投球体勢に入る。

身体を鍛えている彼女だからだろう、彼女はそのボールを辛そうな表情一つ見せずに投げた。

レーン上を転がるボールのスピードはゆったりと、だがその機動はまっすぐと一番ピンを指して転がって行く。

そしてそのままボールは全てのピンを倒していく。

アーニヤの結果はストライク、いきなりの投球でその結果は俺とジノを驚かす。

アーニヤは特に表情を変えずに戻ってきたので、俺はナイス投球とだけ伝える。

これだけならビギナーズラックとも言えるが、その後もストライクやスペアを連発していたので、アーニヤはボーリングが上手い事が判明した。

1ゲーム終わって俺たちのスコアは、俺173、ジノ107、アーニヤ205となり、ジノは1人だけ大差をつけられたのが悔しいのか、「もう1回勝負しよう!」と挑戦してくる。

もう1ゲーム付き合ったがあまり差は埋まらず、ジノは特訓するとの事なので俺とアーニヤはひとまず休憩する事になり、俺は飲み物を買いに、アーニヤはトイレに行くと行ってひとまず別れた。

2人の分の飲み物も買って、ジノたちの元へ帰ろうとしていると、ガラの悪い男が3人、女の子に絡んでいる。

よく見るとその女の子はアーニヤのようだ。

「アーニヤ、この人たちと何かあったのか？」

俺が近づくと、アーニヤはうんざりそうな顔からなんだかほっとしたような表情となり、こちらに近寄ってくる。

「オウ、兄ちゃんその嬢ちゃんの知り合いか？そいつ人にぶつかっておいて謝罪もないんだぞ。こいつその時転んで怪我しちゃったじやねえか、治療費払ってもらうぜ」

今どきこんなことを言うてくる不良がまだ存在しているのか。

「ぶつかつた事はすいませんでした、この子は人と話すのが苦手な仕方ないんです。でもアーニヤにぶつかつたぐらいで怪我するとも思えないんですか。少し見せてもらえませんか？」

俺がそう聞くと、男たちは言葉につまった後、「黙って金払えや！」と言って殴りかかってきた。

普通の人なら3対1など経験した事もないのでやられてしまうだろう。

しかし僕は士官学校に通う軍人候補生だ、白兵戦の訓練もつけているので、向かってくる3人の男達を返り討ちにして、警察に通報し彼らを引き渡した。

軽い事情聴取を受けた後、解放された俺とアーニヤはジノに連絡をして、待ち合わせる事にした。

「レイ、ありがとう。でもなんで助けてくれたの？」

アーニヤは表情を変えずに、そう尋ねてくる。

「アーニヤは大事な仲間だからに決まっているじゃないか。アーニヤが困っているなら俺もジノも絶対にアーニヤの事を助けるよ。それにアーニヤは女の子だから守ってあげないとね」

笑いながらアーニヤにそう告げると、アーニヤは顔を真っ赤にして「ありがとう」とつぶやいて、下をむいてしまった。

さすがに臭いセリフだなと思いつつ再びアーニヤの方をむくと、「一緒に写真を撮ろう」と言ってきたので、写真を撮る事にした。

「ジノが来てからでもいいんじゃないか？」

「いい、二人だけで撮る」

そう言われては仕方がないので、二人で撮る事にした。

アーニヤの肩に手を置いて写真を撮ると、アーニヤは恥ずかしそうに顔を赤くしてたけど、少しだけ笑顔になってくれた。

そして写真を撮り終わるとちょうどジノがやってきて、俺たちは昼食を食べに行く事にした。

私は自分がよくわからない、携帯の中に記録してある事が全く記憶にない事がしばしばある。

そのせいで人と話すのが少し恐くなり、家族以外の知り合いがほとんどいない。

最近はその事はめったに起こらなくなったが、またいつ起こるかわからない。

それが恐くて今でも人と上手く接する事ができない。

それでも、レイは私の事を仲間だと言ってくれた。

そして私の事を守ってくれと言ってくれた。

こんな事を言ってくれた人は初めてだ。

レイの事を考えると頭がいっぱいになる、これが恋と言うものなのか？

レイに2人で写真を撮ろうというと、肩に手を置かれてすごく恥ずかしかったけど、それ以上に嬉しかった。

その写真は私の携帯の待ち受け画面に設定しておいた。

ジノが戻ってきて私の方に近づいてきた。

「アーニヤ、写真撮ってる時のお前すごくかわいかったな、レイにほれたか？」

「なっ！」

「俺はお前の事応援するぜ、だって大事な仲間だからな！」

ジノも私の事を仲間だと言ってくれている。

いつかこの2人には記憶の事を話しそうと思う。

ただなぜか応援すると行った後のジノの笑い声にむかつて、ジノのすねを一発蹴り飛ばしておこう。

俺たち3人は昼食を食べ終わった後、適当に街をぶらぶらしながら次に何をするかを決める事にし、店を出る。

そして店を出て10分、俺が迷子になったのか、あの2人が迷子な

のかはわからないが、とりあえず2人とはぐれてしまった。

きつと周りの珍しい物を見ていたら、それに気を取られてふらふらと行ってしまったに違いない。困ったもんだ。

携帯で連絡を取ろうと思ったが、運悪く先ほど電池切れが確認されている。

2人を探す手段が探し回る以外ないので、とりあえず歩き始める事にしよう。

二人を探しはじめてからはや30分、あちこち探し回っているのだがジノとアーニヤが一向に見つからない。

歩きまわって俺も疲れた、ここらで少し休憩することにしよう。

自販機で冷たいお茶を買おうと思い、お金をいれてボタンを押した。

出てきたお茶を取り出すとなぜか熱く、冷たくない。

なんだ今日は、ジノとアーニヤとははぐれて、その2人を探してたら、不審な行動と勘違いされて警察に引き止められ、冷たいお茶を飲もうとしたら熱いお茶が出てきただと、やる気がなくなりそうだ。

「やってられるか〜！」と思い切り叫びながら、中身が入ったままの缶をゴミ箱のあるほうに放り投げた。

そこから「ゴンッ」と音がして、そちらを見るとピンクの髪の女の子が1人と缶が当たったであろう男が1人。

まずい、デート中のカップルに怪我させてしまったか？

など考えていると、女の子と目があいこちらに近づいてくる。

怒られる前に謝ってしまおう。キチンと謝れば話は通じるはずと考え、謝る事にした。

「デートの邪魔してごめんなさい！」

「助けてくれてありがとうございます！」

……あれ？

学園が終わっていつもどおり護衛と迎えの者が来て、宮に帰らなければならなかったけど、たまには私だって遊びに行きたい。

護衛の者を撒いて街に遊びに来て、最初の方は色んな物を一人で見ながら、楽しく時間を過ごしていました。でも突然変な男の人に絡まれてしまいました。

「お茶にいこう、大丈夫お茶を飲むだけだからさ」と言いながらこの男性の方はしつこくつきまといってくる。

普段なら護衛の方が追い払ってくれるのですが、今回は逃げて来てしまったので助けてくれる方もいません。

だんだんこの男性の方も強引になってきて、今では腕をつかんで無理やり連れて行こうとします。

私は体力のあるほうではありません。

抵抗するのにも疲れてもうダメかと思ったその時、何か声が聞こえて「ゴンッ」と言う音がすると、男性の方が突然倒れてしまいました。

倒れた男性の横にはジュースの缶が落ちていて、周りを見ると私と同じ年ぐらいの男の子が投げ終わった体勢そのまま固まっています。私と目が合う。

あの人が無助してくれたんでしょう、お礼を言いに行かないと。

私が近づいていくと男の子はなぜかあわてだしてしまいました。照れくさいのでしょうか？

男の子の前まで来たので、お礼を言つと、なぜか謝られてしまいました。

「なんだあの男はしつこいナンパ野郎だったのか、デートの邪魔を

して怒られるのかと思ったよ」「

あれは本気で焦った、本日3回目の警察のお世話になるところだったからな。

「そんなわけありません、助けにいただいたのにあなたを怒るなんて」

申し訳なさそうな表情で俺にそう言う彼女。

「俺はレイス・リントンドって言うんだ。レイって呼んでくれればいいよ。君の名前は？」

「私は・・・ユフィと呼んでください」

ここでテンパっていた俺はようやく気づく。目の前の彼女を俺は知っている。

ピンク色の髪でユフィと言えばユーフェミア・リ・ブリタニアしかない。

”ユーフェミア・リ・ブリタニア”

神聖ブリタニア帝国第3皇女で、”ブリタニアの魔女”コーネリアの実の妹で通称ユフィ。

本国で学生として過ごしていたが、兄クロヴィスの死に伴いエリア11の副総督に就任。

残念ながらユフィ本人に指揮能力や政治力はなく”お飾りの副総督”と呼ばれているが、弱い者を守るために自ら立ち向かう強い精神を持ち、全ての人が幸せになれる優しい世界を願って、自らの皇位継承権と引き換えに”行政特区日本”の設立を宣言した。

しかしルルーシユのギアスの暴走で「日本人は虐殺。」と言うギアスをかけられ、抵抗を見せるも、最終的には命令に操られ、式典に集まった日本人の虐殺を命令し自らも虐殺を行ってしまい、その後ルルーシユに撃たれ、スザクに救出されるもすでに手遅れで、特区は成功したと信じながら息を引き取ったある意味この作品で一番不幸な女の子だった。

この時ユフィは皇族として表舞台には立っていないので、世間には名前を知られていないので、俺も知らない振りをしなければならぬ。

「ユフィはしゃべり方がすごく丁寧だけどどこかのお嬢様なの？」

当たり前障りのない質問で会話を続ける。

「あ、はい。そんなところです。変でしょうか？」

「全然、まだ会ったばかりだけど、それがユフィらしさなんだと思うよ」

「ありがとうございます。そうしてもらえると嬉しいです」

俺の言葉に、本当に嬉しそうに笑うユフィに少しドキッとしたのは俺だけの秘密だ。

その後もたわいのない話をして、俺が士官学校に入っている事や、ユフィが俺の一つ年下である事、今日友達と遊びに来てはくれた事を話す。

「私、家庭の事情のせいでお友達がいらないんです、だからレイさんが少し羨ましいです。」

陰のある表情でそう言うユフィに、身分違いとは理解していながらも、俺は答える。

「おいおいユフィ、俺とお前が友達だと思っていたのは俺だけか？」

その言葉を聞いて、ユフィの表情はパアッと明るくなる。

「本当ですか？いえ、私たちは友達です。もう断ってもダメですからね。」

大好きなおもちゃを取り上げられないようにする子供のように、ユフィは俺の腕をしっかりと取ってそう宣言する。

「別に断らないよ、あ、そうだ携帯持ってる？ 出来たら貸して欲しいんだけど？」

「はい、かまいませんよ。」

そいつってユフィから渡された携帯で、ジノと何とか連絡を取り、合流する事になった。

「ありがとう、ユフィ。もう学校の方に戻らないといけないからそ

ろそろ行くよ」

「そうですね」

俺の言葉に残念そうな表情を見せるユフィ。

「ユフィの携帯に俺の携帯の番号を登録しておいたから、もし話しくなったら電話でもメールでもしてくるといいよ。あ、でも電話の時は事前にメールで伝えてくれると嬉しいかな」

そう伝えるとさっきまでとは打って変わって、「絶対に連絡します。」「とって迎えの者呼んで帰っていく。

俺もそのあとジノとアーニヤと合流して、学校へと帰っていった。

今日は嫌な事もあったけどとても嬉しい一日でした。

あのナンパ男の人にも少しだけ感謝しませんと、そのおかげでレイさんとお友達になれたのだから。

今まで近づいてきた人は、私の素性を知っている貴族の家の子どもの方がほとんどで、私ではなくその後ろにいるお父様に近づこうとする人ばかりだった。

でも彼は違う。私の初めてのお友達は、優しくて少しカッコいい人。彼ならきつと私の素性を知っても変わらないに違いない。

少ししか話せなかったけど、なぜだか確信が持てる。

レイさんに「今日は楽しかったです。また一緒に遊びましょうね」とメールを送って今日は休む事にしましょう。

## 6話

俺、ジノ、アーニヤの3人は直属の上司となったエニアグラム卿に連れられて、対EU方面軍の前線基地へとやってきた。

ラウンズがやってきたということ、周りの軍人達の目も自然とそちらに集まる。

ある者畏敬の念をこめた目で、またある者は何時かその地位を奪わんといつぎらついた目で。

そんなエニアグラム卿に視線が集まるからだろう、その後ろにつき従う俺たち3人の姿も彼らの目に留まり、そんな俺たちを写す瞳は、何故こんな子供がと言う疑念の色に染まっていた。

そんな視線などお構いなしに進むエニアグラム卿についていき、俺たちはこの小隊専用にとえられた一室に通された。

「今日からここがお前達の生活スペースだ、アーニヤには悪いが右の部屋を一人で使ってくれ」

エニアグラム卿が指差す方向には、ドアが二つ。

そのうちの二つをアーニヤ、もう一つの部屋を俺とジノで使えと言ふことだろう。

入ったばかりの新兵に個室など与えられるはずもなく、たいていは大部屋に押し込められる。

それを考えたら、俺たちは本当に優遇されていると言ったことがわかる。

「襲われそうになったら物を噛み切ってやれ」

エニアグラム卿は笑いながらそう言うが、その状況を想像すると背筋が凍るように寒くなった。

隣りのジノも同じことを考えたようで、顔を真っ青にしながら苦笑いしている。

部屋を出た俺たちはエニアグラム卿に連れられて、この基地の各部署へと挨拶に回った。

回る先々で、本当にこんな子供を戦場に出して大丈夫なのかと言う視線を浴びまくったが、俺たち3人はそんなものは当初からわかってきっていたので気にしなかったが・・・

最後の部署を回りきると、さすがに緊張の糸が切れ、俺たち三人も廊下で一息つく。

それを見ていたエニアグラム卿も俺たち一人一人を労ってくれる。

「お前達、ご苦労だったな。私もこう言う堅苦しいのは嫌いなんだが、軍と言うものに所属している以上これは我慢するしかない。それではお前達に今日最後の任務を伝える」

その言葉に、だらけていた俺たちも慌てて姿勢を正す。

「格納庫にお前達が登場する予定のKMFが搬入されている。各自

その機体をしっかりと自分ように調整しておくように」

その言葉に、俺たちの疲れきった表情は途端に明るくなる。

それもそうだろう、俺たちは学生だったので自分専用のナイトメアなど持っていなかった。

当然訓練用のKMFは自分用には調整できないので、ようやく自分が好きなように機体をいじれる事になる。

それじゃあ行って来い、そう言うとエニアグラム卿は俺たちと別れ、何処かへ歩いていった。

俺たちも待ちに待った自分だけのKMFが与えられるということ、テンションは急上昇。

格納庫へ向かう足もおのずと速くなる。

「ジノとアーニヤはどんな風に機体を調整するんだ？」

俺は隣りを歩く2人にそう尋ねる。

「俺は高機動戦を意識して少し装甲を削って機体を軽くするぜ、あとランスを装備させるかな。アーニヤは？」

「少し機体が重くなっても装甲を厚くして、銃火器類を多く装備する」

二人とも自分の戦闘スタイルに合った機体に改造して行くようだ。

「アーニヤは俺とジノへの援護で普通以上に銃弾を消費してしまうからな、いつも苦勞かけて悪いな」

俺は氣苦勞をかけているとアーニヤに謝るが、アーニヤは首を横に振る。

「いい、そのほうが早く戦闘が終わるから。レイはどうするの?」

「俺も装甲を軽くすることと、近接向きの武器があれば装備させたいな。ファクトスファイアの性能を少し上げてもらいたいんだけど、それは無理かなあ?」

俺がそう答えると、ジノは不思議そうに尋ね返してくる。

「レイ、近接向きの武器はランスじゃダメなのか? レイはランスの扱い上手かったじゃないか」

「俺は劍とかを使いたいな。ランスはジノも装備するし、2人ともランスで直進的な攻撃をするより、俺が劍を使うことで相手をかく乱させる事ができて攻撃がやりやすくなると思うんだ」

ジノは一撃離脱型、どちらかという俺はインファイト型、訓練ではランスを良く使っていたが、生前の好きな機体がアルトアイゼンや、R-1という格闘主体のものばかり。

そちらに対する憧れが大きいが、現状KMFの格闘武器はスタントンファアー一つだけ、あまりにも心もとない。

だから武器を使うという選択肢になる。

そうすると、チームとして動く以上効率という物を重視し、ジノとは違った武器を持ちたくなるというわけだ。

「なるほど、確かにそのほうが相手もやりづらくなるな」

納得した様子の子ノだが、今度はそれを横で聞いていたアーニヤが俺に尋ねてくる。

「ファクトスファイアの方はどうして？」

「アーニヤは俺たちの援護と自分の事できついだろうし、俺が周りの情報を確認しながら戦えば、2人に指示も出しやすくなるからね。だから少しでも性能を上げたいんだけど・・・さすがに今以上の物は技術部が製作中だろうし、今ので我慢するしかないよな」

俺がそう悲観に暮れていると、何処から現れたのだろう。

白い白衣を身に纏った男性が俺達の会話に参加してくる。

「なかなか面白い話をしてるねえ、ボクも混ぜてくれるかい？」

「えーと、あなたは？」

ジノがその人に名前を尋ねるが、その姿を見て俺はその人物が誰であるかすぐに気付いた。

特徴のある喋り方に、いかにも研究者という風貌のこの男性、この人も原作に登場にしている人だ。

「ああ、ボクはロイド・アスブルンド、ナイトメアや武器の開発を

担当してる技術者だよ。今はここでナイトメアの新しい武器の運用試験をしてもらったためにお願いに来てただけだね、「実戦に使えるかわからん武器など使えるか！」って言われてね、困っていたんだよ」

”ロイド・アスブルンド”

特別派遣嚮導技術部、通称特派の主任を務める技術者で、ランスロツトといった新型のKMFやフrootシステムといった最新KMF用技術を開発した天才博士。

また見た目からは想像できないが、ブリタニア帝国の伯爵である。

「あなたの事はわかりましたけど、何で俺たちの話を？」

言ったら悪いが、突然人の会話に割り込んでくるのはどう考えてもマナー違反。

だから今のようにジノとアーニヤに怪しい目で見られているのだ。

だが、そんな視線など何処吹く風、と言わんばかりにロイドさんは答える。

「キミたちあれでしょ、士官学校から特別に戦場に送られてきたって言う、とても優秀な3人組でしょ。この基地でもすごく噂になっているよ。それでボクも君たちが見たくなくて、見に来たら興味深い話をしたからね、少し声をかけたんだ」

にたにた笑いながら、そう話すロイドさんは実に怪しい。

ここが軍の基地の中でなければ、警察に通報される可能性もあるぞ。

まあ、この人は本当にそんな事を気にしない人みたいなので、俺も気にしないことにしておくが。

「興味深い？ 何がですか？」

「うん、キミは剣を装備したいといっていたよね。ちょうどボクが今回開発したのが君の希望する剣なんだよ。それでキミに実際使ってもらってテストしてもらえないかなと思ったんだけどね、とりあえず見るだけでも見てくれないかな？」

そう言いながらしつかりと俺を連れて行く気満々のこの男、しつかりと俺の服を掴んでいる。

「まあ見るだけならかまいませんが、先に機体の調整もやらないといけないので、行くのは遅くなると思いますよ？」

求めていたものがあるのなら、これはわたりに船と言うものだ。

別に断る理由もないだろう。

「それなら僕が手伝ってあげるよ、キミの機体をボクのラボに持ってくるといい。よし、運ぶように指示は出しておくから、早速行こうか？」

強引に連れて行くこうとするロイドさんに、ジノやアーニヤの制止の声は聞こえず、俺はロイドさんのラボへと連れて行かれた。

「ここがボクのラボだよ」

ロイドさんに連れられ5分ほど歩くと、どうやら到着したらしくそう紹介された。

ロイドさんとともに中に入ると、戻ってきたロイドさんに気づいたのが、一人の女性が近づいてくる。

「ロイドさん運用試験の件はどうになりましたか？ やっぱりダメでしたか？」

どうやら俺の存在に気づいていないらしく、ロイドさんの方しか向いていない。

「セシル君、軍の方はダメだったけど、使ってくれそうな人は見つけてきたよ。例の学生の1人が見るだけならと言っつついてきてくれたんだ」

そこでようやく俺に気づいた女の人、セシルさんがこちらの方に向く。

「ああ、あなたがあの噂の。私はセシル・クルーミーです。この研究室の副主任をしています。よろしくね。ここでは軍の規律は忘れて、話しやすいように話してくれればいいわよ」

”セシル・クルーミー”

特別派遣嚮導技術部、通称特派でロイドの補佐を務める女性で、自身も優秀な技術者であり、フロートユニット・エナジーウイングの考案者である。

特派の主任はロイドであるが、ロイド自身がいい加減なため、特派を実際に取り仕切っているのは彼女である。

料理好きのようでよく料理を作っていたが、本人は味音痴のためなんととも言えない料理を作り出しては、他人に振舞っていた。

「わかりました、俺はレイス・リントンドです。本日付でこの基地に配属されました。よろしくお願いします。ところでさつきもロイドさんが言っていたんですが、あの噂って何ですか？」

自身の知らぬところで噂されるのは気分の良いものではない。

だから尋ねて見たのだが、返ってきた答えを聞いて俺は度肝を抜かれる。

「それはね、将来はラウンズ入りが確実、というほどの腕前を持った学生が3人この基地にやってくると言うことなの、それでかなり話題になっているのよ、あなたたち」

とんでもない噂が流れているようである。

「あれ、ボクはもうラウンズ入りは内定で、この戦いで戦果を挙げ次第、ラウンズに入るって聞いたよ」

何かすごい事になっている。人から人へと伝わる間に話がドンドン捻じ曲がっている。

「何ですかその噂は、俺たちは一度も皇帝陛下と話した事もないし、戦場にも出ていないのにそんなことあるわけないじゃないですか。それに俺たちは学生の中で強かっただけで、まだ実戦も経験してませんからここに居る人たちに勝てるとは思いませんよ」

ありのままの事実を話すが、ロイドさんは俺の方を見てニタアと笑う。

「そんなに謙遜しなくてもいいよ、キミたちのデータ見せてもらったけど、キミたち3人とモース級の腕を持っているし、ここでも勝てる人は少ないと思うよ」

ロイドさんにすごく評価されている、嬉しいのでとりあえずお礼を言っておこう。

「ありがとうございます、それでそろそろ俺に見てもらいたい剣の話をしたいですけど、どこにあるんですか？」

「ああ、あれだよ」

そう言っって見せられたのは、4mほどで結構分厚い剣があり刃が2つに割れている。

「これはメーザーバイブレーションソード、略してMVSと言うんだ。見てわかるとおり今は刃が別れているんだけど、使用時には2つに割れていた刀身が合わさり、高周波振動を起こして、鉄をも両

断することができるんだよ。でも今はまだ大き過ぎて両手でしかナイトメアに装備する事ができないんだ、最終的にはこれを小型化して、両手に一本ずつ持てるようにすると言っのが僕の理想なんだけど、小型化するためにも運用試験がしたいんだ。協力してもらえないかな？」

MVSがすでにあるのは驚いた、まだでかいけど実戦には使えるかもしれない。

「いいですよ、使えそうな武器ですし、試してみたいという気持ちもあります。そのかわり、さっき話していたファクトスフィアの件どうにかありませんか？」

「いいよ、実はそれも溜め込んでいたアイデアがあるんだ」

自分のコレクションを自慢する子供のように、嬉しそうな表情に変化するロイドさん。

これで何とか話がまとまったので、俺の機体調整について話し合いながらお茶を飲んでいると、俺のナイトメアがようやく届いた。

ロイドさんは俺のサザーランドを見回すと、怪しい笑顔を浮かべながら、期待の調整をはじめたのだった。

そしてそれから3日後、調整の終わった俺のサザーランドを受け取りに行くと、左腰にMVSを装備していて、鞘の先が地面についていた、そこには機体の機動性を落とさないようにランドスピナーがついている。

「普段は鞘にいれてあるから使いたい時には鞘から出して使うとい

いよ。でも剣がでかい分キミの機体にも負担がかかるから、あまり多様はしないほうがいいよ。ある程度のデータが取れる分には使ってもらいたいんだけどね」

ロイドさんの注意事項を聞きながら、俺は機体のチェックを進める。どうやらロイドさんは俺の予想以上のチューンを施してくれたようで、機体が俺の動きにとってもなじんでいる。

「キミの機体はここで整備するようにエニアグラム卿と話をつけてあるから、戦場から戻ってきたら、またここに帰ってきてね」

「わかりました」

俺は二人に礼を言うと、この機体の動きを確かめるためにこの一日を費やしたのだった。

次の日、ジノとアーニヤの機体も整備が終わったので、俺たちはエニアグラム卿にミーティングルームへと集められる。

「ようやくお前たちの機体が全機調整が終わったようなので、明日から早速戦場に出てもらおう事になる。最初は簡単な仕事を任せるが、それに慣れたらすぐに前線に出てもらおう事になるので、覚悟していて欲しい」

「Yes, My Lord」

「おまえたちに最後に一つだけ言っておく、戦場に絶対なんて事はない、私も1発銃弾を食らえば死んでしまう。だから戦場にいる間は絶対に気を抜くな」

「 Yes , My Lord 」

こうして俺たちは初めての戦場に立つ事となった。

## 6話（後書き）

とりあえずGW中に手直しを加えたのはここまで。

7話以降は、ちよつと時間をください。

- 本気で締め切りが迫っているレポートをやらなといけないので・・・

## 7話

俺たちがEU戦線に配属されて6ヶ月、俺たちは戦果を上げ続けている。

ラウンズが戦場に加わり、士気の上だったブリタニア軍はこの6カ月間にどんと戦線を押し上げていった。

そんななか、俺たちの初任務はエニアグラム卿の指揮下に入り、偵察を行うというものだった。

偵察任務といってもそれは二つの種類に分かれる、それが隠密偵察と威力偵察である。

隠密偵察とは敵に察知されることなく行う偵察行動であり、威力偵察とは部隊を展開して小規模な攻撃を行うことによって敵情を知る偵察行動である。

俺たちの任務は威力偵察、つまりKMFを用いてEU軍の現状を調査するというものだった。

俺達3人はエニアグラム卿のすぐそばに配置され、彼女の指示を待ちながら戦場を進んだ。

「よし、全機止まれ！」

彼女のその言葉に、この任務についてきていた30ものKMFは一斉にその場で停止する。

「今回の目的はあくまで様子見だ、功を焦って隊を乱すなよ。それから、リントンド、ヴァインベルグ、アールストレイム」

名前を呼ばれ、俺たちはすぐに返事を返す。

「これがお前たちの初陣だ、気持ちを落ち着かせるのは難しいだろうが、お前たちならできる。この戦場でお前たちの名をEUの連中に刻み込んでやれ」

まわりの兵士たちには功を焦るなど諭しながら、それでいて俺たちには名を知らしめろという。

KMFに乗っているため顔は見えないが、彼らの表情はどうなっているのだろうか。

そんなことを考える余裕がある分、俺はまだ落ち着けているのかもしれなかった。

「Yes, My Lord」

そんなことを考えていたら返事をするのを忘れてしまい、一人だけ遅れて返事をする事になった。

Eニアグラム卿からお叱りの言葉を受け、ジノ達からは笑われる羽目になり、戦場だということにとんだ赤っ恥をかいてしまった。

それから少し前に進み、ついに目前にEU軍が現れる。

敵はこちらの動きをつかんでいたのだろう、既に展開された陣形はこちらを迎え撃つべく広がっている。

EU軍の主力、パンツァー・フンメルはブリタニアが開発したKM Fとは異なったコンセプトで開発されている。

ブリタニアのKM Fは地上を高速移動し、そのスピードでアドバンテージを得る。

一方EUで開発されたパンツァー・フンメルは、そのKM Fの機動力の核となるランドスピナーが取り付けられていない。そのかわりにキャノン砲という武装で火力を持たせ、固定砲台という言葉がふさわしい機体となっていた。

それが数十機、整然とした様子でこちらの動きを静観している。

「各機、これより作戦を開始する。先陣はモード隊が取れ、各機、散開！」

その言葉を受け、モード卿の機体を先頭に5機がEU軍へと向かっていく。

そしてそれに続くようにさらに5機が続いていった。

対するEU軍もこちらの動きを見て攻撃を開始する。

さすがに敵の攻撃も厚く、前を行く10機はなかなか敵との距離を詰めることができない。

残った20機も機体を動かし、前を進む10機の援護射撃を行いなから、エニアグラム卿の指示を待つ。

前線の機体は奮戦するが決定的な決め手を欠き、あと一歩のところ  
で戦線を押し戻される。

そんな状況が数度続いたころ、エニアグラム卿から新たな指示が飛  
ぶ。

「私が前に出る、部隊の指揮はラーズ卿が取れ。それからリントン  
ド、ヴァインベルグ、アールストレイム、お前たちも私に続け」

その言葉に俺とジノ、アーニヤの心臓は跳ね上がる。

「Yes, My Lord」

「残りは前線への援護を続ける、行くぞ！」

エニアグラム卿の乗るサザーランドを先頭に、俺達3人もそのあと  
に続く。

「まずは右翼から食い破るぞ、遅れるなよ」

そう言い残し、エニアグラム卿は敵右翼めがけて突撃していく。

俺たちもそのあとに続き、手近な敵に狙いをつける。

「ジノ、右側から回り込め」

俺の言葉に従ったジノは弧を描くように右側から距離を詰める。

ジノの期待に気を取られた敵機は反対側から回り込む俺に気づくの  
が遅れ、その身を破壊される。

俺が敵機を破壊した直後、俺の機体にアラートが鳴る、別の敵機が俺に照準を合わせているのだ。

だが俺はそれを無視するように別の機体に狙いを定める。

俺を狙っていた機体は既にアーニヤにハチの巣にされているのだ。

次に狙いを定めた機体に向けてスラッシュハーケンを射出、しかし距離があつたためだろう、それは敵機に当たることなく回避される。

だがそれでいい、死に体をさらしている敵機の腹にジノの駆るKM Fのランスが突き刺さった。

俺は次の機体を探すが、俺たちの開けた穴から侵入したモード隊の機体が残る機体をつぶしまわっている。

エニアグラム卿自身はすでに中央の敵と戦い始めている。

これが既に戦場を知っていた者たちとの差なのだろうか、だがそんなことを考えている暇はない。

「二人とも、俺たちも遅れずに行くぞ！」

そうやってエニアグラム卿の後を追うように中央の敵へと向かっていった。

結局、この戦闘はブリタニア軍の圧勝で終わった。

やはりラウンズであるエニアグラム卿が戦線に加わってから、流れ

がこちらに傾いた。

エニアグラム卿は一人で16機もの相手を落としたらしい。

俺たちは3人合わせて13機、これがラウンズとの差というものか  
としみじみと感じさせられる結果だった。

そんな俺たちを、モード隊、ラーズ隊、そして援護に回っていた部  
隊の人々はよくやったとほめてくれた。

こちらも5機のKMFを失い、脱出できたのは一人だけ。

残りの4名は亡くなったというのに、彼らはその悲しみも見せずに  
俺たちを激励してくれたのだ。

そんな俺たちはこの初陣の後、すぐに最前線に投入されるようにな  
り、エニアグラム卿の指揮の下、敵を倒し続けた。

そのような状況が2ヶ月も経てば、俺たちは味方からも敵からもエ  
ース扱いされていて、向かう戦場はいつも最前線。場合によっては  
エニアグラム卿の指揮下から離れて戦場に立つこともあった。

戦場に出ると俺たちを倒して手柄を立てようという敵が増え、それ  
をことごとく倒してきた俺たちの敵KMFの撃破レコードはドンド  
ン上がり、今月は月別の小隊での新記録も出して、今度表彰される  
ことになっているらしい。

話は変わるが、俺のサザールランドはロイドさんの魔改造を受け、元  
のサザールランドではなくなっている。

姿形はサザールランドなのだが、中身は別物になってしまっていた。機体性能がサザールランドの1.3倍ほどになっている。

どうも俺の機体を使って、ランスロットに使うパーツの実験をしているようだ。

一度ランスロットの完成予想データを見せてもらったのだが、アニメではサザールランドの1.6倍と言っていたが、俺が実験に参加しているせいで向上したのか、予想データは1.85倍となっている。

俺の適合率は85%ぐらいで今までの中では一番高いらしく、もし完成までに俺以上の適合者が現れなかったら、君にこの機体を任せるとまで言われていた。

ランスロットのデヴァイサーである枢木スザクは94%の適合率を出していたので、俺にランスロットが回ってくる事はないだろう。ランスロットはいい機体だと思うが、俺の考えている理想のナイトメアとは少し違うので、それでいいと思う。

機体のパーツを改良するたびに俺にも説明はしてくれるのだが、毎回機体の性能が徐々に上がっていて、それに対応するために毎回訓練を行うので結構疲れる。

毎回少しずつ性能が上がるので、自分の考えと機体の動きがずれが生じることがある。

そのことをロイドさんに相談すると、「キミなら大丈夫だよ」といってスルーされる。

(その後セシルさんに怒られたので、いったん改良が終了し、よう

やく自分の考えと機体の動きとを合わせる事ができるようになった。  
ありがとうセシルさん)

まだ改良が続いていた時、一度ジノとアーニヤが俺の機体の異変に気づいて、事情を聞きに来て、俺のサザーランドを見て口を開きっぱなしだ。

「レイ、こんな機体に乗って今まで俺たちに合わせてくれたのか。これならもつと活躍できるはずだろ、クソツ、俺たちがレイの足をひっぱっていたのか」

ジノは何を勘違いしたのか、俺の機体を見て、俺が手加減していると勘違いしたらしい。

だが言わせてもらうが、実際に足をひっぱっているのはむしろ俺だ。性能が徐々に変わるナイトメアに対応できなくなり、時々連携を崩していたのは他でもない俺なのだ。

「私たちが足手まとい、悔しい」

ジノの勘違いによりアーニヤまで勘違いしてしまった。

「ロイド博士、俺とアーニヤの機体も一緒に改良してくれませんか？ このままでは俺とアーニヤが自分を許す事ができません。お願いします！」

「お願いします」

二人はそう言ってロイドさんに頭を下げる。

完全な二人の感違いなのだが、ロイドさんは黙って目を輝かせている。

「彼もあの機体に慣れるのに君たちとの訓練とは別に個人で訓練しているよ、キミ達も彼と同じ訓練をする覚悟があるのかい？」

言葉ではジノとアーニヤの覚悟を確認するようなことを尋ねる。

「はい！」

「それならいいよ、君たちの機体もここに持ってきてもらおうように手配して置くよ、その後君たちの意見を聞きながら、改良するよ」

ものすごくいい笑顔で笑っているロイドさん。心の中では、これにより多くの実験データがとれる、と小躍りを舞っているに違いない。

こうしてジノとアーニヤの機体も魔改造を受ける事が決定したのだった。

先に話した敵KMFの撃破レコード新記録の表彰のために、なぜか俺たち3人は本国に戻ってきていた。

案内されて連れて来られたのはペンドラゴン宮殿。

中にはこの日のために集められた爵位を持つ人物も多くいるらしい。  
レコードの新記録ってそんなにすごいのか？

「ジノ、今日って表彰だけだよな？ 何でこんなに人集まっているんだ？」

「わからない。何か噂では大事な発表があるから、集まるように言われたらしいぞ」

俺の問いかけにジノもあいまいな答えしか返せない。

アーニヤは興味がないのか携帯に夢中である。

「大事な発表？ まあ俺たち一軍人には関係ないと思うし気にしないでおこう」

「おう、そうしようぜ」

俺の言葉にうなづくと、ジノはアーニヤのほうへ顔を向ける。

「アーニヤはもう少し嬉しそうにしてくれよ、いつもみたいに淡々としてちゃダメだぞ。これは俺たち3人がもらう表彰なんだ、みんなで喜ばないと」

「わかった、努力する」

さすがにアーニヤも携帯をしまい、ジノの言葉に従う。

「よし、そろそろ時間だから行こつぜ」

それから俺たちは陛下の見守る前で、軍のお偉方から勲章と表彰状を与えられた。

そして何事もなく表彰式も終わり、これでおれたちの出番は終わり。

俺たちが下がろうとすると、陛下が立ち上がる。

「レイス・リントンド、ジノ・ヴァインベルグ、アーニヤ・アールストレイム」

皇帝陛下に名前を呼ばれ、俺たち3人はひざまずく。

「お前たちの武功を認め、今ここにナイトオブブラウンスへの加入を認める」

周りは騒然となるが、何も知らされていないかった俺たちの衝撃はもつとすごい。

ジノもアーニヤも目をパチクリとして、口を開けて驚いている。

俺も開いた口がふさがらない。

「どうした、聞こえなかったのか？レイス・リントンド、ジノ・ヴァインベルグ、アーニヤ・アールストレイム」

「Yes, Your Majesty」

「お前たちはブラウンス披露会が終わるまでは本国で待機をしている、

その後はおつて指示を出す。よいな」

「Yes, Your Majesty」

知らされることなくラウンズ入りが決定していた俺たち3人は、こうしてラウンズ入りを果たした。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n0604t/>

---

新たな世界で

2011年5月11日00時20分発行